

1. は じ め に

南九州大学の FD 推進委員会は平成21年度に活動がスタートし、平成 28 年度で 8 年目となりました。この 8 年間、大学教員をはじめとした教職員の皆様方のご協力のもと、数々の事業を実施することができました。特に、授業評価アンケート、授業参観及びFD講演会については定着してきており、FD活動の大きな柱になっております。また、平成 24 年度からは学生の魅力度・満足度の観点から点検・評価するためのシステム作りとして「新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査」を、また、平成 25 年度からは FD の情報公開活動をそれぞれ開始しており、年度を重ねる毎に充実してきております。

本年度からの新たな取り組みとしては、南九州短期大学 FD 推進委員会および南九州学園 SD 推進委員会との情報共有や連携強化の取り組みを開始し、来年度から始まる SD 義務化に向けての基盤づくりに着手しました。また、年度の途中には大学院が FD 推進委員会の構成員として組み入れが FD 推進委員会規程に位置付けられました。本活動報告書においても、大学院に係る FD 活動の一部を掲載いたしました。

しかしながら、それぞれの活動についてはまだまだ改善すべき点があり、さらに充実させるための検討が必要です。本報告書で、平成 28 年度に行った FD 活動事業をふりかえり、平成 29 年度以降、また、その後のFD活動の充実・発展のために役立てていただければ幸いです。

最後に、平成 28 年度の本学の FD 活動にご理解をいただき、また、さまざまな実施事業にご参加いただいた教職員の皆様方に心より感謝申し上げます。また本報告書の作成をご担当いただいた各学科・センター・事務局の教職員の方々には多大なご協力をいただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

平成 29 年 3 月

平成 28 年度南九州大学 FD 推進委員会
委員長 平岡直樹

平成 28 年度 FD 推進委員会メンバー：

(部門内五十音順)

環境園芸学科	管理栄養学科	食品開発科学科	子ども教育学科	教養・教職センター
姜 暁求	川北久美子	柏田 雅徳	谷村 佳則	スモール・ブライアン
平岡 直樹	渡邊 純子	外山 英男	野村 宗嗣	

大学院	事務局（宮崎）	事務局（都城）
平岡 直樹	赤木 裕美	猪股 浄文
	奥野 実	金森 博之
	猶原みどり	村社 美利
	沼口 智彦	米良恵美子

2. 平成 28 年度 FD 推進委員会の開催報告

平成 28 年度は、下記のように 6 回の FD 推進委員会を開催した。

1) 第 1 回 F D 推進委員会

日 程： 平成 28 年 5 月 19 日（木）

時 間： 16：44～17：10

出席者： [宮崎] 6 名 [都城] 8 名

欠 席： [宮崎] 2 名 [都城] 1 名

オブザーバー： 0 名

議案：

1) 平成 28 年度委員長の選出について
報告・連絡事項

1) ヒヤリングの結果について

2) その他

①平成 27 年度 F D 活動報告書について

②F D 活動の情報収集（その 1）

③F D・S D 担当理事からの連絡

2) 第 2 回 F D 推進委員会

日 程： 平成 28 年 6 月 17 日（金）

時 間： 16：30～17：30

出席者： [宮崎] 7 名 [都城] 8 名

欠 席： [宮崎] 1 名 [都城] 1 名

オブザーバー： 1 名（F D・S D 担当理事）

議案：

1) 本年度の F D 推進委員会の進め方について

①オブザーバーについて

②開催日程等について

③短大 F D 推進委員会，S D 推進委員会との連携について

④事務局の体制について

2) F D・S D 担当理事からの報告

3) 本年度の事業計画について

3) 第 3 回 F D 推進委員会

日 程： 平成 28 年 7 月 15 日（金）

時 間： 16：35～17：20

出席者： [宮崎] 7名 [都城] 6名

欠 席： [宮崎] 1名 [都城] 3名

オブザーバー： 0名

議案：

- 1) FD 講演会の実施について (その 2)
- 2) 大学院での授業評価アンケート実施について
- 3) 授業参観の実施方法について
- 4) 教員の教育面における評価制度について
- 5) 新入生魅力度調査の実施状況について (確認)
- 6) FD 活動の情報収集について (その 2)
- 7) その他

報告・連絡事項：

- 1) その他

4) 第 4 回 F D 推進委員会

日 程： 平成 28 年 10 月 14 日 (金) 16 : 31 ~ 17 : 15

時 間： 16 : 31 ~ 17 : 15

出席者： [宮崎] 6名 [都城] 7名

欠 席： [宮崎] 2名 [都城] 2名

オブザーバー： 0名

議案：

- 1) FD 講演会の実施報告について
- 2) 前期授業評価アンケートの実施結果について
- 3) 新入生魅力度調査アンケートの実施結果について
- 4) 後期授業評価アンケートの実施について (学部生+大学院生)
- 5) 卒業予定者満足度調査の実施について
- 6) 後期授業参観の実施について
- 7) 平成 29 年度事業計画及び予算計画作成について
- 8) FD 活動の情報収集について (その 3)
- 9) その他

報告・連絡事項：

- 1) その他

5) 第 5 回 F D 推進委員会

日 程： 平成 28 年 12 月 2 日 (金)

時 間： 16 : 30 ~ 17 : 23

出席者： [宮崎] 6名 [都城] 7名

欠 席： [宮崎] 3名 [都城] 1名

オブザーバー： 0 名

議案：

- 1) 議事録の作成について
- 2) 後期授業評価アンケートの実施について（再確認）
- 3) 卒業予定者満足度調査の実施について（再確認）
- 4) 後期授業参観の実施について（その 3）
- 5) 平成 29 年度事業計画及び予算計画作成について
- 6) 他大学の FD 活動と実践方法について
- 7) FD 活動の情報収集について（その 4）
- 8) その他

報告・連絡事項：

- 1) SD の義務化について
- 2) その他

6) 第 6 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 29 年 2 月 28 日（火）

時 間： 13：30～14：26

出席者： [宮崎] 8 名 [都城] 6 名

欠 席： [宮崎] 1 名 [都城] 2 名

オブザーバー： 1 名（FD・SD 担当理事）

議案：

- 1) 後期授業評価アンケートの集計結果について
- 2) 卒業予定者満足度調査の集計結果について
- 3) 後期授業参観の実績について
- 4) 平成 28 年度 FD 活動報告書の作成について
- 5) FD 活動の情報収集について（その 5）
- 6) その他

報告・連絡事項：

- 1) SD の義務化に伴う FD 推進委員会と SD 推進委員会の位置づけについて
- 2) 平成 29 年度事業計画ヒヤリングについて

3. 平成 28 年度に実施した FD 活動について

平成 28 年度に実施した南九州大学のFD活動の概要を下記に示す。

事業① 授業評価アンケートの実施(前期・後期)

教育目的の達成状況を点検・評価するとともに、教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として、例年と同様に継続して実施した。アンケートにおいては学生自身の受講姿勢、及び授業に対する5段階評価の確認とともに自由意見欄を設け、授業の良い点、改善を求める点等を求めている。授業評価アンケートは集計後、結果は各教員に開示し、各教員は結果に基づく授業改善報告書を作成していただいた。また学科別にアンケート集計を行い、学科別にも分析を行った。今回のアンケートで得られた各教員個人および学科の問題点・改善点は今後の教育活動に活用する。

事業② 授業参観の実施(後期)

授業評価アンケートと同様に教員の教授法改善等を目的として毎年行っている。平成28年度には、より一層多くの教職員に参観を求めるため、前年度の倍増を一つの目標として参加促進を行った。その結果、平成 27 年度の参加実績が 20 人であったのに対し、本年度は 44 人の参加となり、前年度比 2.2 倍となり、目標を達成した。また、授業参観後に提出されるアンケートも FD 推進委員で共有し、各学科の活動に反映させることとした。より多くの教職員方に参観いただくことはこの事業にとって重要であるので、今後さらなる改善を進める。

事業③ FD 講演会の実施

教員の FD 活動に対する理解および FD 活動の推進を目的として平成 22 年度から行っている。平成28年度は講演会を1回行った。北九州市立大学地域創生学群の学群長である眞鍋和博教授を講師としてお招きし、「北九州市立大学における地域連携・実践型教育の展開～地域の担い手としての大学生を発見～」という題目で講演していただいた。多くの教職員に参加していただき、充実した講演会となった。

事業④ 各学科独自の FD 活動の実施

各学科においても全学的な事業同様に、学科独自の特色ある FD 活動を本年度も活発に行った。

事業⑤ 新入生魅力度評価アンケートおよび卒業予定者満足度評価アンケートの実施

本調査は、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。本事業により様々な課題を知ることができたが、必要に応じてアンケート内容などの改善を行っていく予定である。本事業で得られた結果は、各学科における教育活動および研究活動のみならず、広報活動や学園の運営の方向性を考えるための参考とする。

事業⑥ 他大学等の FD 活動の情報収集

他大学から寄せられる FD 活動に係る情報の共有化に加え、積極的に他大学の FD 推進活動を調査

し、共有することを開始した。本年度は、各学科やセンターの分野に近い他大学の FD 推進活動をそれぞれが調査し、優れた FD 推進活動の情報を共有した。情報の共有方法は、情報の早期の共有化を果たすために、情報の入手後すぐに FD 推進委員全員と FD・SD 担当理事、短大 FD 推進委員長、学園 SD 推進委員長に対して、PDF 化した入手資料を E-mail を利用して配信を行った。この方法で平成 28 年度は 16 回の情報を配信した。また、その後の FD 推進委員会でも入手情報の確認を行った。

事業⑦ 他大学、FD フォーラム等への参加

1)平成 28 年 9 月 13 日(火)

FD ネットワーク“つばさ” 主催「大学は就職予備校ではないぞ！」に参加
会場:山形大学

2)平成 28 年 9 月 13 日(火)7 月 21 日(木) ～22 日(金)

高等教育コンソーシアム宮崎 FD 研修会に参加

①7 月 21 日(木)「DP・CP・AP の見直しをどう進めるか」

会場:宮崎大学

②7 月 22 日(金)「3 つのポリシーに対応した学習成果の測定と可視化」

会場:宮崎国際大学国際教養学部

3)平成 28 年 11 月 15 日(火)

宮崎大学工学部 FD 講演会「入学者選抜の改革及び大学教育の改革」に参加

4)平成 28 年 12 月 12 日(月)

宮崎大学障がい学生支援室 FD/SD 研修会「発達障がい学生とキャリア支援」に参加

事業⑧ FD 活動の情報公開の検討

他大学では、FD 活動をホームページ上や印刷物で紹介しており、「FD 活動の公開」が進んでいる。本学においても「FD 活動の公開」について引き続き大学ホームページ上で情報公開を行う。

事業⑨ FD 活動報告書(本報告書)の作成

平成 28 年度に行った FD 活動を記録するために実施した。報告書は事業の詳細のみならず、課題や反省点も記録することで、次年度以降の FD 活動等に役立てていく。

その他の事業1:本学の SD 推進委員会との連携の模索

SD 推進委員会が開催する企画に参加し、本学の SD 活動に関する情報を収集した。また、年度末の SD 研修参加報告会に参加した。業務や教育の多様化が進展し、従来よりも、より効率的・効果的な大学のシステム整備が必要となってきたため、FD・SD 活動の協調を前進させた。主に E メール

ルを用いて南九州学園 SD 推進委員会とは情報を共有することに努めた。また、9 月に実施した FD 講演会は SD 推進委員会と共催で実施した。

その他の事業 2:南九州短期大学の FD 推進委員会との連携の模索

南九州学園における業務や教育の多様化が進展し、従来よりも、より効率的・効果的な学園全体のシステム整備が必要となってきたため、大学と短大の FD 活動の協調を開始させた。主に E メールを用いて南九州短期大学の FD 推進委員会とは情報を共有することに努めた。

4. 授業評価アンケート報告(前期・後期)

平成 28 年度においても、教員の教授法改善や授業に対する満足度の把握等を目的とした授業評価アンケートを実施した。前期は、7 月 11 日（月）～15 日（金）の期間に、後期は、12 月 6 日（火）～12 月 12 日（月）の期間に実施した。

各学科のアンケートの実施結果は以下のとおりである。

(1) 環境園芸学科

平成 28 年度前期・後期 授業評価アンケート 集計結果分析

アンケートの設問

学生の授業取り組みに関する質問

設問① 私はこの授業によく出席した

設問② 私は授業内容について質問や発言をした

設問③ 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）

教員の授業実施方法に関する質問

設問④ 教員の声は聞き取りやすかった

設問⑤ 教員の板書（または PPT・配付資料等）は読みやすかった（見やすかった）

設問⑥ 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた

設問⑦ 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

設問⑧ 教員は熱意を持って授業をしていた

総合評価

設問⑨ 私はこの授業内容を理解できた

設問⑩ 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた

設問⑪ 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

表 1. 平成 28 年度前期の回答の集計

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	571	252	128	18	6	975	4.40
②	93	169	407	112	192	973	2.86
③	205	289	351	72	54	971	3.53
④	463	303	155	42	10	973	4.20
⑤	426	304	166	63	13	972	4.10
⑥	636	232	94	9	2	973	4.53

⑦	480	304	159	22	9	974	4.26
⑧	586	268	102	12	2	970	4.47
⑨	285	404	239	34	12	974	3.94
⑩	406	374	166	18	10	974	4.18
⑪	377	367	198	21	12	975	4.10

表 2. 平成 28 年度後期の回答の集計

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	406	154	117	17	2	696	4.36
②	73	147	331	64	81	696	3.10
③	157	215	244	53	27	696	3.61
④	323	214	122	27	9	695	4.17
⑤	305	206	148	31	6	696	4.11
⑥	443	157	83	8	4	695	4.48
⑦	351	218	108	12	6	695	4.29
⑧	401	183	103	4	5	696	4.40
⑨	219	270	168	28	9	694	3.95
⑩	297	233	134	20	9	693	4.14
⑪	278	247	140	23	6	694	4.11

表 3. 過去 7 年間のアンケート調査による各設問の平均値

設問		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
H22	前期	4.48	2.67	3.19	4.08	3.82	4.25	3.98	4.30	3.56	3.86	3.77
	後期	4.38	2.81	3.32	4.21	3.97	4.33	4.14	4.40	3.76	3.99	3.97
H23	前期	4.37	2.66	3.23	4.05	3.94	4.26	3.99	4.36	3.65	3.98	3.90
	後期	4.24	3.05	3.44	4.18	4.10	4.35	4.21	4.37	3.85	4.04	4.03
H24	前期	4.28	2.79	3.35	4.18	4.02	4.40	4.11	4.40	3.78	4.06	4.01
	後期	4.24	2.95	3.45	4.18	4.02	4.32	4.15	4.40	3.83	4.05	4.01
H25	前期	4.37	2.82	3.46	4.19	3.98	4.42	4.11	4.44	3.84	4.11	4.02
	後期	4.29	2.69	3.34	4.05	3.97	4.40	4.08	4.33	3.75	3.98	3.93

H26	前期	4.46	2.92	3.55	4.24	4.08	4.46	4.21	4.42	3.88	4.11	4.10
	後期	4.37	2.85	3.51	4.19	4.08	4.46	4.26	4.47	3.95	4.13	4.11
H27	前期	4.37	2.89	3.50	4.21	4.12	4.51	4.27	4.46	3.95	4.17	4.14
	後期	4.34	2.92	3.55	4.26	4.20	4.61	4.35	4.48	4.07	4.23	4.18
H28	前期	4.40	2.86	3.53	4.20	4.10	4.53	4.26	4.47	3.94	4.18	4.10
	後期	4.36	3.10	3.61	4.17	4.11	4.48	4.29	4.40	3.95	4.14	4.11
平均値		4.35	2.86	3.43	4.17	4.04	4.41	4.17	4.41	3.84	4.07	4.03

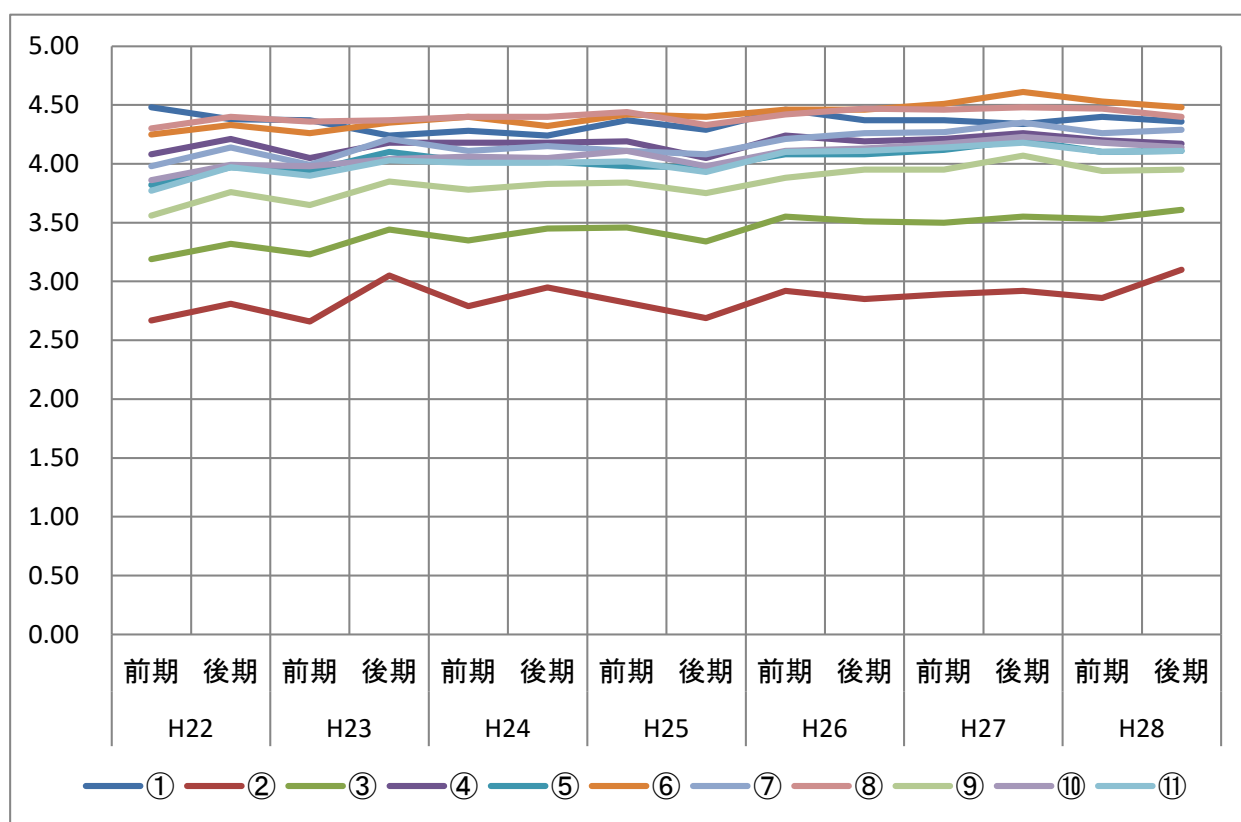


図1. 過去7年間のアンケート調査による各設問の平均値（表3のデータをグラフ化）

1) 全体について

昨年度と本年度を比較すると、後期の設問②、⑥、⑨の3項目で、0.1ポイント以上の増減が見られるが、他の設問19項目においては0.1ポイント以下の変動である。年度によって、アンケート調査には増減があるものの、全体を通じては、若干ではあるが上昇しているように見える。

このアンケートを開始した平成22年度からのデータの平均値と、今年度の前期後期の各平均値と比較した結果、後期の設問⑧が0.01ポイント平均値よりも下回っているが、他はすべて上昇していることから、長年の授業改善は一定の効果を産み出していると考えられる。

今後も、講義・実習・演習等の教育を実施する教員としては、これまでの各自で記載した授業改善報告書を踏まえ、授業改善に取り組みたい。

2) 各設問について

〔学生の授業取り組みに関する質問〕

設問①：前期後期ともに、平均値は 4 点台であるが、よく出席したとは考えていない。回答「1、2、3」の学生が前期は約 16%、後期は約 20%程度存在することに注視し、学生の取り組み姿勢の改善を図り、今後はこの値を下げるような取り組みが望まれる。この設問は例年高いポイントとなっており、学生の「自分に甘い」気質がうかがえる。

設問②：他の設問と比べ、これまでと同様にポイントが低い。少人数でのゼミとは違い、受講生が多い講義では、「質問や発言がしづらい」「時間がない」などもその要因として考えられるが、教員が質問の時間を設けなかったり、学生に質問を促さなかったりした可能性も考えられる。講義終了後に質問される場合も多くみられることから、講義終了後の質問についても設問に記載しても良いと考える。

設問③：本年度の後期は、これまでの各期の結果の中では最も高く 3.61 ポイントであった。各期とも設問②に次いで低評価であり、回答「3」の「どちらともいえない」を含めると約半数前後の学生が積極に取り組んでいないと回答している。各科目の位置づけを第 1 回目の授業や分野ならびに専攻説明会などを通じて明確にし、特色に合わせて自発的な参加意欲を高めるような具体的方策が望まれる。

〔教員の授業実施方法に関する質問〕

設問④：前後期ともに概ね高い評価であった。そして前期後期とも、教員の声が聞き取り難いとの低評価の回答「1、2」は、5%程度の結果となった。これは長年の取組みにより、マイクの使用や教室の変更などの各教員の対応により改善が図られたものと考えられる。今後も各授業において、学生に声が聞こえているかを確認することにより、より改善がなされるものとする。

設問⑤：前期後期ともに比較的高評価であった。しかし、これまでに引き続き、前後期ともに、5～8%が回答「1、2」と教員の板書等は見づらいとある。今後も、さらなるプレゼンテーション方法や質の工夫など、各教員の対応で改善が必要と考える。

設問⑥：前後期ともに例年通り比較的高い評価であった。授業時間については、比較的厳守されていると判断できるが、今後もさらなる継続が望まれる。

設問⑦：前後期ともに高評価であった。不満を抱いている学生は少なく、概ね良好であると考えられる。しかし、3%程度の不満を持つ回答もあることから、現在の状況を維持しつつも、授業中、学生に意見を聞いたり、問いかけをしたりするなど学生の理解度や意見を吸い上げるさらなる工夫が望まれる。

設問⑧：昨年度よりは若干数値が低くなったが、概ね高評価であり、各教員が熱意を持って授業に取り組んでいると判断される。今後もさらなる継続が望まれる。

〔総合評価〕

設問⑨：後期において平均値より若干数値が下がったが概ね高評価を維持している。しかしながら、授業を非常によく理解できたとする回答「5」は全体の 30%前後であり、回答「4」の多少理解できたと回答している 40%前後の学生よりも少ないのが現状である。多くの学生が自信をもってよく理解できたとは言えない状況にある。設問②および③の結果と合わせ考えると、学生の取り組み姿勢といった根本的な課題とも考えられる。今後の継続的な分析と取り組みが望ま

れる。

設問⑩：前後期ともに概ね高評価であった。ただし回答「1、2、3」を合わせると、まだ20%以上の学生に将来役に立つと認識されていない。科目の意義や位置づけ、特色の理解を深めるとともに、授業内容に関する実践的な内容も授業に織り込み、将来における職業意識を高める工夫などが望まれる。

設問⑪：昨年度より若干数値が下がったが、概ね高評価である。回答「5」と特に満足感を得られていると回答した学生の割合は40%前後であり、「4、5」を含めると80%前後と概ね良好であると考ええる。一方で、25%足らずの学生は回答「1、2、3」と満足であったとは答えていない。この評価は他の全設問を通した総合的な評価であり、多くの学生において絶対的な満足感が得られているわけではない。これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善を図っているが、学生自信の授業に対する積極的な取り組み（設問③）や理解度を向上させる（設問④）とともに総合評価の改善に結びつくと考えられる。各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。

(2) 管理栄養学科

平成28年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成27年度前期結果)

設問1) 私はこの授業によく出席した	4.80(4.84)
設問2) 私は授業内容について質問や発言をした	3.05(3.07)
設問3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)	3.65(3.69)
設問4) 教員の声は聞き取りやすかった	4.48 (4.36)
設問5) 教員の板書(又はPPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.35 (4.29)
設問6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.65 (4.64)
設問7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.35(4.39)
設問8) 教員は熱意を持って授業をしていた	4.52(4.54)
設問9) 私はこの授業内容を理解できた	4.01(4.04)
設問10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた	4.54(4.63)
設問11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.28 (4.27)

- ・ 管理栄養学科では前期においては平成25年度から今年度(平成28年度)まで、設問2)、設問3)の項目を除いてすべての項目で4.00ポイント以上という高い評価が得られている。

- ・ 今回のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 27 年度前期)と比較して、設問 4)、5)、6)、11)において、0.1～0.12 ポイントの範囲で高い得点が得られ、設問 4)については平成 26 年度前期結果をも上回った。これらは教員の授業に対する積極的な取組みを学生が支持している結果といえよう。
- ・ 設問 4)、5)、6)以外では－0.02～－0.09 ポイントの範囲でわずかながら平均値が低下した。中でも、平成 26 年度に遡ってこの 3 年間の推移をみると、「設問 9) 私はこの授業内容を理解できた」では、4.19 (H26)→ 4.01 (H28) で-0.18 ポイントの低下、「設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた」では、4.69 (H26)→4.54 (H28) で-0.15 ポイントの低下がみられた。これらに、わずかながらポイントの低下がみられた「設問 1) 私はこの授業によく出席した」と「設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)」の結果を合わせて検討すると、前期に関しては学生の授業に対する出席や積極的に学ぶ姿勢や、授業で得られるはずの知識や技術への理解度(もしくは自己効力感)がやや低下し、加えて専門職として働くことのイメージにつながりにくい傾向もあるのではないかと推察される。
- ・ 上記はわずかな低下とはいえ、この結果を踏まえ、各教員が学生の理解度を考慮した授業をしていく必要があると考える。また授業への出席状況を改善させる工夫や、特に座学の授業では質問や発言といった積極性をいかに向上させるのか、学科内でも授業の取り組みの事例などをもとに情報を共有し問題解決に向け検討していく必要があるのではないかと考える。
- ・ 学科全体で反省点をまとめると、学生自身の授業への取組に関する設問を除いて、すべて 4.00 ポイント以上という高い評価が得られており、おおむね良好な結果が得られた。特に、前年度と比較して、教員の授業に対する改善のための積極的な取組を学生が支持していると思われる項目もあり、授業評価アンケートの結果が生かされていると思われる。ただし、設問によっては、この 3 年間で低下傾向のみられる項目が認められたことに対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問 9)、10)の結果にあるように、学生の理解度に応じた授業への工夫を行い、将来、地域に貢献する専門職として働くことへの動機づけとなるような環境づくり等の対策が必要であると考えられる。

平成 28 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成 27 年度後期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した	4.76 (4.83)
設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした	3.23 (3.08)
設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)	3.78 (3.60)
設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった	4.59 (4.47)
設問 5) 教員の板書(または PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.44 (4.40)
設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.66 (4.82)
設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.44 (4.44)
設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた	4.61 (4.59)
設問 9) 私はこの授業内容を理解できた	4.22 (4.10)
設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた	4.65 (4.70)
設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.44 (4.42)

- ・ 管理栄養学科では後期においても平成 25 年度から今年度(平成 28 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という高い評価が得られている。
- ・ 今回のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 27 年度後期)と比較して、設問 2)、3)、4)、5)、8)、9)、11)と多くの項目で 0.2～0.18 ポイント上昇した。その他の設問項目では、－0.05～－0.16 ポイントの範囲でわずかながら、平均値が低下した。なお設問 7)では平均値に変化はなかった。
- ・ さらに平成 26 年度後期と比較すると、「設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった」において、4.54(H26) → 4.59(H28) と上昇し、前期と同様、3 年間でみても改善されていた。また「設問 9) 私はこの授業内容を理解できた」においても、4.19(H26) → 4.22(H28) と改善し、教員の授業への熱心な取組と相まって学生の授業への理解度が増していることがうかがえる。
- ・ また、平成 27 年度に－0.16 ポイントの低下がみられた「設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした」と「設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)」については、それぞれ 0.15、0.18 ポイント上昇し、授業評価アンケートの結果を受けとめ、個々の教員が改善へ向けて工夫をし、学生の積極性を引き出す取組を行っていることがうかがえる。
- ・ 今回特に低下がみられた(－0.16 ポイント低下)項目は、「設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた」であるが、平成 26 年度の 4.69 ポイントと比較すると大きな差異はなく、もともと評価の高い項目のため、今後も教員各自の取組に期待したい。また一方で特に午前中の授業に遅れてくる学生も見受けられ、なにがしかの対応を余儀なくされ授業

時間に影響がある場合は学生への指導も必要であろう。

- ・ 学科全体で反省点をまとめると、後期においては項目によりポイントの変化がみられるが、大きく改善した項目もあり、おおむね良好な結果が得られたことで、授業評価アンケートの結果が授業に生かされていると思われる。評価値のわずかな低下がみられた項目に対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問2)3)の学生の積極性に関する点数が、この3年間の推移をみても3ポイント台と他の項目より低いいため、“アクティブラーニング”等、座学においても学生が授業に積極的に参加しやすい工夫や環境づくり等の対策が必要であると考えられる。次年度に向けても、この2項目の改善にさらに教員一同取り組むことで、より高い質の授業が期待されるのではないかと考える。

＊【アクティブ・ラーニング】（文部科学省 用語集より）

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

(3) 食品開発科学科

平成 28 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 28 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	33
山下 博	食商品学	3	32
工藤哲三	食品加工学	1	34
寺原典彦	有機化学総論	1	21
外山英男	生物学Ⅰ	1	82
紺谷靖英	微生物学	1	31
長友泰潤	宗教学	1	45
中瀬昌之	生物化学Ⅰ	1	28
合計			306

(参考)平成 27 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	9
山下 博	フードビジネス論	3	11
工藤哲三	食品開発科学概論	1	29
寺原典彦	食品基礎実験	1	37
外山英男	生物学Ⅰ	1	105
紺谷靖英	微生物学	1	40
中瀬昌之	農産物利用学	3	34
		合計	265

2. 平成 28 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	187	47	19	3	1	257	4.62	
②	27	45	99	37	49	257	2.86	
③	39	57	111	40	9	256	3.30	未回答1
④	92	76	55	28	6	257	3.86	
⑤	87	75	54	25	15	256	3.76	未回答1
⑥	154	63	34	4	1	256	4.43	未回答1
⑦	73	75	71	22	14	255	3.67	未回答2
⑧	95	70	74	12	6	257	3.92	
⑨	36	89	93	28	11	257	3.43	
⑩	60	86	88	16	7	257	3.68	
⑪	58	84	82	24	9	257	3.61	

(参考)平成 27 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	231	40	16	4	0	291	4.41	
②	41	45	111	47	46	290	2.96	(無効回答1)

③	49	83	119	36	3	290	3.48	(未回答1)
④	112	100	56	17	5	290	4.02	(未回答1)
⑤	114	86	63	19	8	290	3.96	(無効回答1)
⑥	197	68	21	1	4	291	4.56	(未回答1)
⑦	124	76	56	23	12	291	3.95	
⑧	127	89	55	14	5	290	4.10	
⑨	68	100	86	29	8	291	3.66	
⑩	89	109	71	17	5	291	3.89	
⑪	88	93	77	22	11	291	3.77	

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

「特にそう思う」と「多少そう思う」が昨年より非常に増えた。今後は引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心に対応していく。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

あまり質問や発言には積極的ではないという結果が得られた。そこで、各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けて更なる努力が必要である。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

回答番号3以下の否定的な学生がいまだに多数いることに対して早急に対策を講じるべきである。また、大半の学生にさらに自学自習の習慣を定着させる必要がある。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が3.67－4.43と前年並みであった。概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、従来の平均値をほぼ維持している。設問 5「教員の板書は見やすかった」に関しては、前回より改善がなされていた。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が3.43と前年より低下した。また、回答番号3以下の回答がかなり多く、学生の理解度を増すための教員側の更なる努力の継続が必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値が3.68となり前年より低下した。この結果を真摯に受け止めて、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の更なる改善を継続していくことが必要である。

設問 11. 満足度

平均値が 3.61 で前年より低下した。これについても、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の改善を真摯に継続していくことが必要である。

平成 28 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 28 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	14
中瀬昌之	健康食品概論	2	27
寺原典彦	食品分析学	1	29
柏田雅徳	食品製造学	2	30
山下 博	食品流通・消費論	2	27
外山英男	生物学Ⅱ	1	16
工藤哲三	パン・菓子製造学	1	12
		合計	155

1. (参考)平成 27 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	35
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	13
寺原典彦	食品分析学	1	28
柏田雅徳	発酵食品学	1	37
山下 博	食品流通・消費論	2	13
外山英男	フードスペシャリスト論	1	33
黒木英浩	食品企業論	3	29
		合計	186

2. 平成 28 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	98	43	11	1	2	155	4.51

②	17	26	77	21	14	155	3.07
③	18	37	73	19	8	155	3.25
④	64	51	33	7	9	155	4.11
⑤	61	52	31	9	2	155	4.04
⑥	91	46	17	1	0	155	4.46
⑦	66	49	37	2	1	155	4.14
⑧	75	53	22	3	1	154	4.29
⑨	35	70	43	5	1	154	3.86
⑩	48	64	41	2	0	155	4.02
⑪	37	66	46	4	2	155	3.85

未回答 1

未回答 1

(参考)平成 27 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	119	50	17	2	0	188	4.52
②	22	40	76	23	27	188	3.04
③	29	62	73	19	5	188	3.48
④	82	59	37	7	3	188	4.12
⑤	79	57	36	11	5	188	4.03
⑥	120	45	21	2	0	188	4.51
⑦	81	57	39	6	5	188	4.08
⑧	102	51	29	4	2	188	4.31
⑨	43	86	43	8	8	188	3.79
⑩	74	67	37	5	5	188	4.06
⑪	60	73	43	5	7	188	3.93

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.51 で前年とほぼ同様で良好である。一方、回答番号 3 以下の割合が約 9%存在するが前年度よりも減少した。引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心とした対応を継続していく必要がある。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 3.07 で、前年度と同程度で、設問中最も低い。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けてさらなる改善・工夫を継続していく必要がある。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

平均値が 3.25 で前年より少し低下した。回答番号 2 以下の割合がかなり多く、学生に自学自習の習慣を身に付けさせるための更なる工夫が必要である。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 4.04－4.46 と概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、これまでの傾向とほぼ同様である。しかし、この方面においても結果に安住せず、さらなる改善を継続していくべきと思われる。また、学年による学生の気質の変化も考慮していく必要がある。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.86 となり、前年度より向上した。回答番号 3 以下の回答が 3 割を超え、授業科目によっては学生にとって理解が困難であることがうかがえる。よって、学生の理解度を増すための教員側の努力と工夫を継続していくことが必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 4.02 であり、前年度より低下した。学科で設定している科目群及び授業内容と学生の将来像が結び付くように提供する科目や授業内容をさらに改善していく必要がある。

設問 11. 満足度

平均値が 3.85 で、これもまた前年度より低下した。この結果は、授業の早急な改善が必要であることを意味している。さらに、3を回答した学生もかなりいるので、学生の満足度が上がるように更なる努力と工夫を継続することが必要である。1と2と回答した学生が 6 人もいるが、この点については、今後詳しく調査する必要がある。見落としている課題が隠れている可能性がある。

(4) 子ども教育学科

1) 学生授業評価アンケート実施と授業改善の取り組み

□アンケート集計結果

【前期：実施教員 16 名 回答数 620 名】(授業ごとの複数回答)

【後期：実施教員 16 名 回答数 672 名】(授業ごとの複数回答)

表1 全項目（①～⑪）平均値の年度別・前後期データ

(数字は、回答の平均値)

設問 番号	質 問 内 容	2016 前期	2016 後期	2015 前期	2015 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	4.72	4.68	4.68	4.66
②	私は授業内容について質問や発言をした	3.30	3.08	3.18	2.98
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）	3.82	3.62	3.69	3.57
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	4.38	4.35	4.23	4.00
⑤	教員の板書(またはPPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.23	4.15	4.13	3.99
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.56	4.54	4.56	4.44
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.31	4.26	4.24	4.13
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	4.48	4.45	4.53	4.35
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	4.19	4.03	4.18	3.98
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた	4.38	4.32	4.43	4.26
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.27	4.18	4.29	4.09

表2 各項目の「特にそう思う」「多少そう思う」の占める割合（％）

(小数点以下は四捨五入により算出)

設問 番号	質 問 内 容	2016 前期	2016 後期	2015 前期	2015 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	96	94	95	93
②	私は授業内容について質問や発言をした	41	36	36	33

③	私はこの科目に積極的に取り組んだ (予習や復習をした)	63	54	58	55
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	83	83	80	77
⑤	教員の板書（または PPT・配布資料等） は読みやすかった（見やすかった）	79	75	48	70
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろう としていた	89	89	90	85
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を 進めていた	81	78	66	70
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	87	85	91	83
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	80	74	82	71
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの かたちで将来役に立つと感じた	85	83	87	81
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が 得られた	82	77	83	76

□アンケート結果の分析

【全体的分析】

表 1 に示すように、今年度における学科教員の平均値が 4 ポイント以上の項目は、全 11 項目中、前期で 9 項目、後期も 9 項目と、全体としての授業評価は良好であり、前年度と比較すると後期では 2 項目増加している。

次に、表 2 に示す「特にそう思う」、「多少そう思う」の占める割合についてみると、80% 台以上の項目は、前期で 8 項目、後期は 5 項目あり、同様に良好ととらえることができ、前年度と比較すると前期で 1 項目、後期でも 3 項目増加している。

以上のように、表 1 及び表 2 の結果を前年度と比較すると、教員に対する授業評価は、前年度に比べて相対的に高くなっている。前年度の反省事項を受けて、教員各自が授業改善に当たってきた成果が示された結果ともいえる。

また、各項目の中でも「学生の授業取り組みに関する質問」である、項目②「質問や発言」及び項目③「予習や復習」は、前年度に比べ表 2 の本年度後期を除いて、平均値や割合が高くなってきているが、他項目に比べると極端に低いため、満足のいく結果とはなっていない。

このため、我が国が進める大学教育の改革の一つとして、教育方法の質的転換でもある「アクティブ・ラーニング」（学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習方法）の実施が提起されているように、今後は学生と教員が双方向に向き合い、かつ学生が能動的に参加し、参加したくなる授業展開の在り方を工夫していく必要があるように思われる。

以下は、昨年度と本年度における、前期、後期それぞれについての概括的な分析である。

【前期について】

○表 1 から見えてくること

前年度前期と比較して、全 11 項目のうち平均値が高くなっているのは 7 項目もあった。前年度の改善事項の課題を踏まえて、各教員が授業改善に取り組んだ成果が数値として表れた結果であるといえる。

○表 2 から見えてくること

前年度前期に比較して、全 11 項目の割合が高くなった項目は 6 項目で、5 項目が低くなっているが、15%以上高くなった項目が 2 項目あった。その中でも、項目⑤「教員の板書」は、31%も高くなっている。これも、表 1 と同様に、本年度に向けた授業改善の成果といえる。

【後期について】

○表 1 から見えてくること

前年度後期と比較して、全 11 項目の平均値が高くなった。その中でも、一番高くなった項目が④「教員の声の聞き取りやすさ」であり、0.35 ポイントも増加している。前年度の改善事項の課題を踏まえて、各教員が授業改善に取り組んだ成果が数値として表れた結果であるといえる。

○表 2 から見えてくること

前年度後期と比較して、全 11 項目の割合が高くなった項目は 10 項目で、低くなったのは 1 項目だけであり、その割合も 1 %の減少であった。全体的に良好な結果であるといえるが、一番高くなった項目でも 8 %であるため、これからの課題に対する授業改善の取り組み次第では、さらなる増加が見込めるだけに、各教員の一層の努力が必要である。

(5) 教養・教職センター

設問

番号、略語、文章

番	略	文
1	出席	私はこの授業によく出席した
2	発言	私は授業内容について質問や発言した
3	取組	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習と復習した）
4	聞取	教員の声は聞き取りやすかった。
5	資料	教員の板書（または PPT・配布資料など）は読みやすかった（見やすかった）
6	時刻	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた
7	反応	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた
8	熱意	教員は熱意を持って授業をしていた

番 略	文
9	理解 私はこの授業内容を理解できた
10	役立 私はこの授業で学んだ内容はなんらかの形で将来的に役立つと感じた
11	満足 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

回答

番号と意味

番号	意味
5	特にそう思う
4	多少そう思う
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	全くそう思わない

授業評価アンケートの 11 つの設問は 3 つの分野に分れている。設問 1 から 3 は「学生の授業取り組みに関する質問」、4 から 8 は「教員の授業実施方法に関する質問」、9 から 11 は「総合的評価」関連の設問に分かれたの構成になっている。

結果を考えたり、視覚化(data visualization)にしたりするため平均 (avg)だけではなくて、中立的(neutral)な評価を捨てて、肯定的(positive)と否定的(negative)な回答に注目した。自分と関連性がないか何かの理由でアンケートの質問を考えたくない人は「どちらともいえない」(「3」)にするとする。ある程度「思う」か「思わない」か決められない人が多いだとちゃんと反応している人の結果が見えなくなる恐れがある。

アンケートの人数と実施

今年の前期と後期の平均人数の差が、去年と比べると、大きくない。

教員人数と回収枚数

学期	先生	生徒	平均
H28 前期	7	414	59
H28 後期	7	295	42
H27 前期	4	248	62

学期	先生	生徒	平均
H27 後期	7	231	33
H26 前期	9	450	50
H26 後期	6	335	55

アンケート実施の講義、人数

H28 前期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物学の基礎	111
スモール, ブライアン	英語コミュニケーション I	100
章大寧	農業政策論	51
西村盛正	体育実技	48
長友泰潤	宗教学	45
植村秀人	教職概論	42
岩田賢士	中等教科教育法・農業	17

H28 後期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物の世界	89
植村秀人	キャリア入門	80
長友泰潤	哲学	53
西村盛正	体育実技	27
岩田賢士	特別活動論	23
スモール, ブライアン	英語コミュニケーション II	17
章大寧	環境問題入門	6

「学生の授業取り組みに関する質問」は学生の「出席」(1)と「発言」(2)、「取組」(3)について、教員一人一人の問題より、講義人数と学校教育、アテンション・エコノミーの課題だと思う。人数が多くなると学生一人ひとりに「発言」する機会を与えるのが難しくなる、講義の時間が限られているし、慣れていない人はパブリック・スピーキングが難しいだし。アルバイトやインターネットなど大学の勉強以外の時間への要求が多いのが課題だ。情報が安いだと言意が高い("When information is cheap, attention is expensive" James Gleick). 専門科目と違って資格・試験の(人参みたいな)動機・目的意識がないはずの教養科目にとって、外部の動機(ロバの前にぶらさげる人参)と違うモチベーションが必要だ。ロバの後ろにぶらさげるムチも使ったらいけないだろう。(人類学の名セリフ、"Gifts make slaves, whips make dogs",を参考にして上下の犬社会じゃなくて、平等連帯の人間社会の教育を考えたい。) 学生が外部のムチと人参以外の価値感を理解できるように努めるべき。説得者(Persuader)にとって情報の利便さと容量より、自分自身の価値観と関連性のほうが大事だと気付かせる必要だ。教養科目が内部の価値観についての意識を高めるのに役立つ。メディア・リテラシーと結びつけるといいはず。

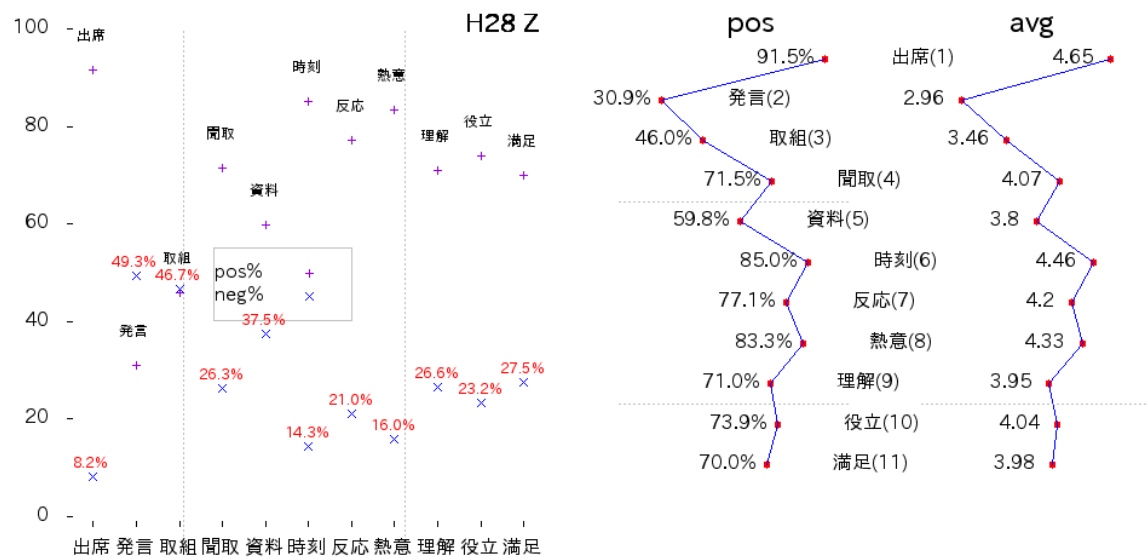
「教員授業実施方法に関する質問」は一番FD(教員開発・成長)に関連性(Relevance)がありそう。評価が高いう。平均人数が59人の前期の講義でも「発言、質問」(設問2)関連の質問結果が一番低くて平均2.96、肯定的な(答えは5と4の)評価は30.9%と否定的な(答えは1と2の)評価は49.3%で、平均人数の42人の後期の講義になると「発言、質問」(設問2)がまだ一番低い平均結果は3.21と肯定的(positive)な回答は39.5%に上がった。まだ否定的(neg)な回答は半分近くの46.6%ですけど、本格的な参加型学習(アクティブ・ラーニング)を取り入れるような仕組みできたら「発言、質問」した気持ちが増えるでしょう。「開発養育教会」の"大学FDプログラム"を参考にしたいです

(<http://www.dear.or.jp/facilitator/prg.html#4>)。

アンケート結果

平成 28 年前期

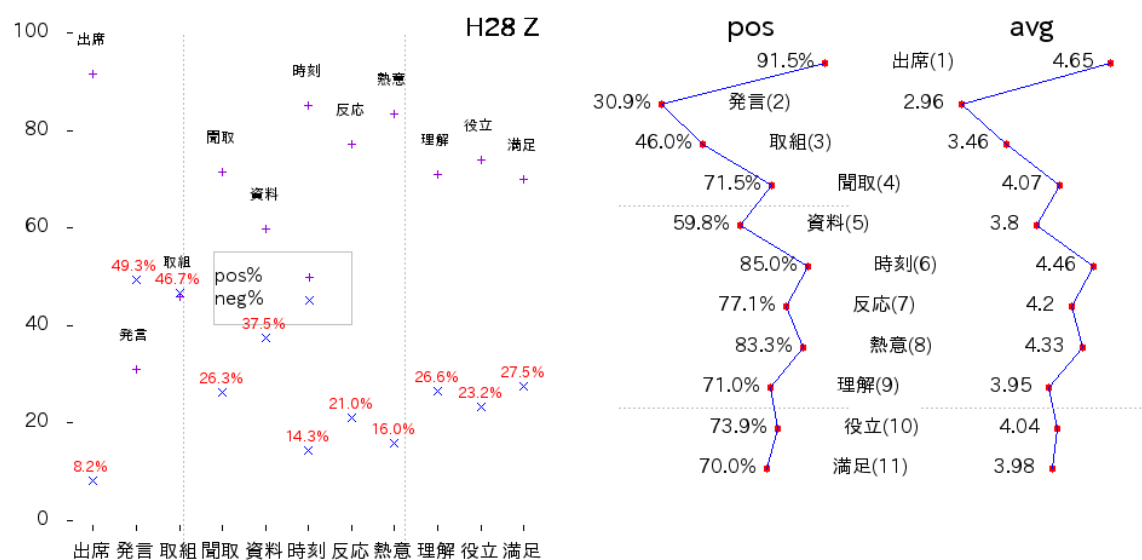
番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	91.5	8.2	4.65	309	70	30	4	1	0
2	発言	30.9	49.3	2.96	61	67	164	40	82	0
3	取組	46.0	46.7	3.46	90	100	161	32	30	1
4	聞取	71.5	26.3	4.07	181	112	89	19	9	4
5	資料	59.8	37.5	3.80	134	110	122	31	11	6
6	時刻	85.0	14.3	4.46	262	89	54	5	3	1
7	反応	77.1	21.0	4.20	204	115	76	11	8	0
8	熱意	83.3	16.0	4.33	217	127	60	6	3	1
9	理解	71.0	26.6	3.95	144	150	84	26	10	0
10	役立	73.9	23.2	4.04	162	144	84	12	12	0
11	満足	70.0	27.5	3.98	150	140	99	15	10	0



平成 28 年後期

番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	91.9	7.5	4.67	229	42	19	3	2	0

番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
2	発言	39.5	46.6	3.21	57	59	109	28	41	1
3	取組	48.6	46.9	3.55	82	60	100	37	13	3
4	聞取	69.2	28.1	4.02	136	68	59	24	8	0
5	資料	65.5	31.1	3.93	113	79	78	13	10	2
6	時刻	81.6	17.7	4.35	170	70	42	10	2	1
7	反応	72.9	25.7	4.12	135	78	61	14	4	3
8	熱意	76.4	22.6	4.22	148	75	56	10	3	3
9	理解	71.2	26.7	4.00	109	99	65	13	6	3
10	役立	68.3	29.0	3.99	121	79	70	15	8	2
11	満足	67.5	30.1	3.93	105	92	71	17	7	3



6年間の平均結果表の平均結果

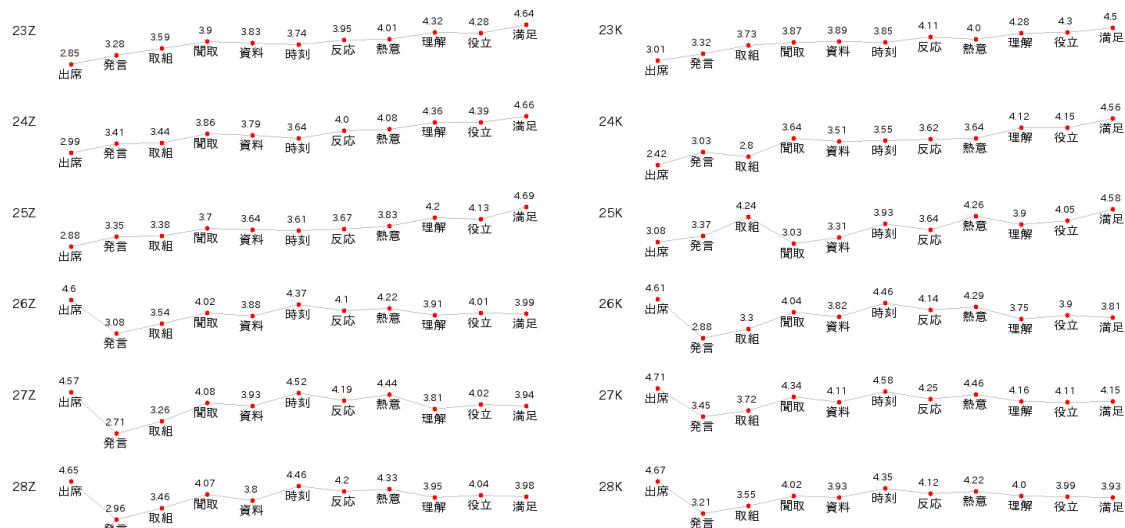
平成 23 年前期から 28 年後期までの平均結果表

6 年間の平均結果

23Z	23K	24Z	24K	25Z	25K	26Z	26K	27Z	27K	28Z	28K	略	番
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---	---

23Z	23K	24Z	24K	25Z	25K	26Z	26K	27Z	27K	28Z	28K	略	番
2.85	3.01	2.99	2.42	2.88	3.08	4.60	4.61	4.57	4.71	4.65	4.67	出席	1
3.28	3.32	3.41	3.03	3.35	3.37	3.08	2.88	2.71	3.45	2.96	3.21	発言	2
3.59	3.73	3.44	2.80	3.38	4.24	3.54	3.30	3.26	3.72	3.46	3.55	取組	3
3.90	3.87	3.86	3.64	3.70	3.03	4.02	4.04	4.08	4.34	4.07	4.02	聞取	4
3.83	3.89	3.79	3.51	3.64	3.31	3.88	3.82	3.93	4.11	3.80	3.93	資料	5
3.74	3.85	3.64	3.55	3.61	3.93	4.37	4.46	4.52	4.58	4.46	4.35	時刻	6
3.95	4.11	4.00	3.62	3.67	3.64	4.10	4.14	4.19	4.25	4.20	4.12	反応	7
4.01	4.00	4.08	3.64	3.83	4.26	4.22	4.29	4.44	4.46	4.33	4.22	熱意	8
4.32	4.28	4.36	4.12	4.20	3.90	3.91	3.75	3.81	4.16	3.95	4.00	理解	9
4.28	4.30	4.39	4.15	4.13	4.05	4.01	3.90	4.02	4.11	4.04	3.99	役立	10
4.64	4.50	4.66	4.56	4.69	4.58	3.99	3.81	3.94	4.15	3.98	3.93	満足	11

平均結果図



平均結果の視覚化(sparkline with numbers,text)

アンケート結果は教養・教職センターのFD話し合いの土台作りに役立つ。そして、アンケート実施は数値の視覚化(Data Visualization, see Edward Tufte's *Beautiful Evidence*) のトレーニング(see Phillip Janert's *GnuPlot in Action: Understanding Data with Graphs* and emacs org-mode manuals)になる。 教養・教職センターの

アンケート実施は、 毎回は教職員人と講義と学生数が違うので年ごとと学期ごとの比較評価としてあまり参考にならないけど大きい流れが見えてくる。 全大学でも同じように「質問や発言をした」について設問 2 の結果は低い方です。 その結果を引き上げるとすればどんな工夫が効果的であるか話になる。 今までの学校と大学、またはメディアと町(city)など社会的な教育効果の在り方についての話にも繋がる。 受験や視覚のための勉強には発言や質問が不要かもしれない。 従来の学校と大学では参加型学習体験、または自発的に社会と町に参加する機会は多くないようだ。 従来の学校教育と商業文化の街は受け身の消費者だけを必要とされているので、自立した人間として考えたり、行動したりする機会が多くないだろう。

以前は講義の学生平均人数の評価の相関性を注目した。やっぱり人数が少ければ少ないほど学生は質問・発言しやすい、資料が見やすい。 そして、教員は学生の理解への確認もしやすくて、学生の満足感を得やすいだろう。 以前は人数の少ないと教員の授業実施についての質問の平均結果が高いようだった。 学生人数が増 えると総合評価と学生自身に取組だけじゃなくて、授業実施についての結果が下るように見えた。

「学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた」(10)の平均結果は低く見える学期も目立つ。 教員の問題でもあれば、現代社会のお流行りの浅はかな価値観の問題でもあるだろう。 大学教育の目的は資格と就職を得ることだけではなく、自由社会に参加する、自立した地球市民になるためちおう理念(価値観)への意識を高めて、実感させることを検討するべき。 「短期間で就職先を辞める卒業生が多い」ことも意識して広い意味で学生と社会のニーズに答えれるような講義の内容と在り方を考えたい。または教養・教職センターは大学の課題である「各学部の有機的つながりの欠如」にどんなふうに取り組めるか検討したい。

以前と続いて、アンケート結果を視覚的に示すことを、 情報デザイン(Edward Tufte)の理念から教材作りの訓練として見ている。 フリーソフトを使って簡単なプログラム(スクリプト)を組めると視覚的な表現も自由自在になる。 毎年の反復開発(Janert's "iterative development")累積でより簡潔な図(グラフ)作れるようになる。 フリーソフトの **emacs** (と **org-mode**) おかげで、学問で課題になる **Reproducible Research**(再現可能な研究)と **Literate Programming**(文芸的プログラミング)のトレーニングをしながら、クラシックなアプリケーションとパソコン言語(**emacs** と **lisp**) の教育利用の可能性も考える。 学生が「理解」するのに必要なことがあれば、パソコンにしても何でもできるようになると **FD**(教員開発・成長)になる。

センター話し合いのたたき台として使った資料は上のデータ視覚化の画像と下にある設問と答えと実施した教員と講義のまとめ：

解答の番号と意味1

番号	略	文
1	出席	私はこの授業によく出席した
2	発言	私は授業内容について質問や発言した
3	取組	私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習と復習した)
4	聞取	教員の声は聞き取りやすかった。
5	資料	教員の板書(またはPPT・配布資料など)は読みやすかった(見やすかった)
6	時刻	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた
7	反応	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた
8	熱意	教員は熱意を持って授業をしていた
9	理解	私はこの授業内容を理解できた
10	役立	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの形で将来的に役立つと感じた
11	満足	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた
12	刺激	授業から知的刺激をうけた
13	見方	この授業を受けて、新しい物の見方や知識を獲得した実感がありますか?

解答の番号と意味1

番号	意味
5	特にそう思う
4	多少そう思う
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	全くそう思わない

教員人数と回収枚数

学期	先生	生徒	平均
H28前期	7	414	59
H28後期	7	295	42
H27前期	4	248	62
H27後期	7	231	33
H26前期	9	450	50
H26後期	6	335	55

H28後期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物学の基礎	111
スモール, ブライアン	英語コミュニケーションⅠ	100
章大寧	農業政策論	51
西村盛正	体育実技	48
長友泰潤	宗教学	45
植村秀人	教職概論	42
岩田賢士	中等教科教育法・農業	17

H28前期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物の世界	89
植村秀人	キャリア入門	80
長友泰潤	哲学	53
西村盛正	体育実技	27
岩田賢士	特別活動論	23
スモール, ブライアン	英語コミュニケーションII	17
章大寧	環境問題入門	6

(6) 大学院

本年度より、大学院においても授業評価アンケートを実施することとなった。以下に実施の要領及び手順等を示す。

1) 実施の要領及び手順等

①目的

教員の授業の教授方法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として実施する。

②対象

大学院研究科に所属する教員が担当する授業（原則 1 教員 1 科目：2 授業以上も推奨するが、2 授業目以降のアンケート集計は、各教員が行う）

ただし、個人情報保護の観点から、アンケートは受講者が 2 名以上の授業において実施することとし、受講者 1 名の授業では実施しない。

③実施時期

あらかじめ定められた 1 週間の間を原則とするが、この期間での実施が不可能な場合は多少前後しても構わない。

④使用するアンケート票及び授業改善報告書の様式は別に示す通り（様式①・②）。

⑤実施手順

- i 学生支援課より、各教員へ「実施する授業名」「アンケート実施日・時間」「受講者数」について案内するので、指定する期日までに回答する。
- ii 学生支援課は、事前に受講生分のアンケート用紙を準備しておく。
- iii 教員は、アンケート実施当日、学生支援課窓口にてアンケート用紙を受け取る。
- iv 教員は、授業時間にアンケートの目的及び提出方法について説明するとともに、アンケートは無記名であり、学生の成績評価とは無関係であることを説明する。
- v 教員は、学生に対して、回答したアンケートを同日中に学生支援課窓口に提出するよう指示する。
- vi アンケートの集計結果は、学生支援課を通じて各教員に報告がある。各教員は、集計結果・自由記述欄結果をもとに授業改善報告書を作成し、FD 推進委員長へ提出する。各教員は、授業の問題点を意識した授業を行い改善に努める。

(その他)

- ・自由記述欄は、学生や教員単位で設定可能とする。独自なものを作成する場合には、アンケート用紙は各教員が準備し、その旨を学生支援課に連絡する。
- ・教員が担当する科目をすべて行う場合は、実施しても問題はないが、その科目の集計作業は実施する教員が行うこととする。

2) アンケートの設問

学生の授業取り組みに関する質問

設問① 私はこの授業によく出席した

設問② 私は授業内容について質問や発言をした

設問③ 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）

教員の授業実施方法に関する質問

設問④ 教員の声は聞き取りやすかった

設問⑤ 教員の板書（または PPT・配付資料等）は読みやすかった（見やすかった）

設問⑥ 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた

設問⑦ 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

設問⑧ 教員は熱意を持って授業をしていた

総合評価

設問⑨ 私はこの授業内容を理解できた

設問⑩ 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた

設問⑪ 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

3) 前期授業評価アンケート集計結果分析

4 つの授業において、合計 9 名の学生からの回答があった。結果は下表のとおりである。回答数が極めて少ないため、分析結果には信頼性が欠ける可能性があるが、概ね高評価と言える。

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	8	0	1	0	0	9	4.78
②	8	0	1	0	0	9	4.78
③	8	0	1	0	0	9	4.78
④	8	0	1	0	0	9	4.78
⑤	8	0	1	0	0	9	4.78
⑥	8	0	1	0	0	9	4.78
⑦	8	0	1	0	0	9	4.78
⑧	8	0	1	0	0	9	4.78
⑨	8	0	1	0	0	9	4.78
⑩	8	1	0	0	0	9	4.89
⑪	8	0	1	0	0	9	4.78

4) 後期授業評価アンケート集計結果分析

2つの授業において、合計4名の学生からの回答があった。結果は下表のとおりである。回答数が極めて少ないため、分析結果には信頼性が欠ける可能性があるが、概ね高評価と言える。

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	3	1	0	0	0	4	4.75
②	2	1	1	0	0	4	4.25
③	3	0	1	0	0	4	4.50
④	3	0	1	0	0	4	4.50
⑤	3	0	1	0	0	4	4.50
⑥	4	0	0	0	0	4	5.00
⑦	4	0	0	0	0	4	5.00
⑧	4	0	0	0	0	4	5.00
⑨	3	1	0	0	0	4	4.75
⑩	3	1	0	0	0	4	4.75
⑪	3	1				4	4.75

5. 後期授業参観報告

平成 28 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に授業参観を実施した。実施要領を以下に示す。

【実施手順】

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い、参観レポート（添付資料）を記入する。（当該レポートの様式は、後日メールにて配布する。参観を希望する教員は自身で印刷して参観に参加する。
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが、できるだけ多くの教員に参加してもらう。
- ・参観レポートは、各キャンパスの「学生支援課」窓口へ提出する。取りまとめ後に参観授業の担当教員へ渡す。

参観対象授業の一覧

学科/ センター	教員氏名	実施日	時間	科目名	受講者 (学年)	教室	備考
環境園芸	山口 健一	1 月 17 日 (火)	1 限目	総合防除論	94 人 (3 年生)	都城キャンパス 1205	
	北村 泰一	1 月 18 日 (水)	2 限目	水辺環境論	40 人 (2 年生)	都城キャンパス 1103	
	平岡 直樹	1 月 20 日 (金)	1 限目	都市計画論	47 人 (3 年生)	都城キャンパス 1205	
管理栄養	甲斐 敬子	1 月 10 日 (火)	3 限目	臨床栄養学 実習Ⅲ	30 人 (3 年生)	宮崎キャンパス 1115	
	竹之山 慎一	1 月 30 日 (月)	3・4 限目	食品加工学 実習②	35 人 (2 年生)	宮崎キャンパス 1606	実習時間: 13:10～15:35
食品開発科	紺谷 靖英	1 月 17 日 (火)	2 限目	生物化学Ⅱ	35 人 (1 年生)	宮崎キャンパス 1403	
	柏田 雅徳	1 月 17 日 (火)	3・4 限目	食品開発実習 Ⅰ	38 人 (2 年生)	宮崎キャンパス 1606	
子ども教育	酒井 喜八郎	1 月 17 日 (火)	3 限目	教職実践演習	32 人 (4 年生)	都城キャンパス 小児保健実習室	
教養教職	スモール・ ブライアン	1 月 18 日 (水)	3 限目	英語コミュニ ケーションⅡ	20 人 (1 年生)	都城キャンパス 1208	

後期授業参観の結果の詳細については、本学の学科構成を考慮して、学科・センター別に以下に結果を示す。

(1) 環境園芸学科

1) 授業参観の開催数と参観者数

FD推進委員会では、1学科当たり2つの授業参観の開催を標準として提案しているが、環境園芸学科では例年3授業を開催している。参観者数は、昨年度は計8名であったのに対し、本年度は15名であった。大学全体としては、昨年度比2.2倍の参観者数であったが、本学科では倍増には届かなかった。授業参観への参加者からは、自身の授業の参考になったとか、有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられているため、さらに参観の機会を促すための対応策を検討する必要がある。

平成28年度 環境園芸学科授業参観と参加者数

教員氏名	実施日	科目名	受講者 (学年)	参加者数	アンケート 回収数
山口 健一	1月17日(火)	総合防除論	94人 (3年生)	7	6
北村 泰一	1月18日(水)	水辺環境論	40人 (2年生)	4	1
平岡 直樹	1月20日(金)	都市計画論	47人 (3年生)	4	1
計				15	8

2) 授業参観アンケート

参観者数15名の内、アンケートの提出があったのは8件であり、半数近くの参観者が、授業提供者へのフィードバックの機会であるアンケートを提出していない。引き続き、参観者数の増大と合わせてアンケート提出の促進をはかる必要がある。授業提供者がアンケートを通じ、より一層の教授法改善などのFD推進につながると考えられる。

(2) 管理栄養学科

(対象授業)

授業①： 甲斐 敬子 教授 1月10日(火) 3限 1115教室
臨床栄養学実習Ⅲ

授業②： 竹之山 慎一 教授 1月30日(月) 3・4限 1606教室
食品加工学実習②

(参観者)

授業①： 0名

授業②： 5名

(課題)

- ・ 教授会・学科会議等での周知は出来ているが、今後も学科内での参加促進を図る必要があると考える。
- ・ 授業①に関しては、十分な周知期間がとれなかったためと考えられる。

参観の準備は整っていたにも関わらず、それがいかせなかったのは残念である。今後、授業参観実施期間については、余裕をもって設定した方が、授業実施者・参観者ともに調整しやすいのではないかと考えられる。

- ・ 授業②には5名の参加があった。実施後のアンケートにより、それぞれ「授業の長所」に言及した上で「自分の授業や業務に取り入れたい点」や「参観した授業の改善に参考となる意見（アドバイス）」についても多くの意見が寄せられ、授業参観を通じてお互いの教育力向上の機会になったと考えられる。

(3) 食品開発科学科

1) 対象授業

2名の教員が担当する下記科目を授業参観対象科目として実施した。

日時	授業科目	担当教員	参観者	
1月17日(火) 2 講時	生物化学Ⅱ	紺谷	3 名	横堀仁志、黒田年洋、山下博
1月17日(火) 2、3 講時	食品開発実習Ⅰ	柏田	3 名	岩田賢士、中瀬昌之、外山英男

2) 参観結果

授業参観は、授業実施教員の改善につながる可能性のみではなく、参観者にとっても、自身の授業改善に対する意識を必要に応じて高めることにもつながると考えられているが、今回の参観者は上記のとおりである。この結果に対しては、さらに改善する必要がある。今後は、参観義務化の必要性の有無を検討することも選択肢の一つと考えられるが、授業参観の必要性についても検討する必要がある。さらに、校務の多忙化により、参加したくとも参加できなかったケースがあると思われるので、その点についても検討が必要であろう。

(4) 子ども教育学科

本学科では、2017年1月17日（火）、下記の教員による参観授業が実施された。

○3 限目 酒井 喜八郎 講師 「教職実践演習」 参観者 8 名

本講義では、ワークショップ形式をとり、グループ討論等も交えて学習が主体的に学べるよう工夫されたものであった。また、スマートフォンを使って調べ物をするなど、積極的な身近な情報機器の活用がなされていた。

(5) 教養・教職センター

平成 28 年度 教養・教職センター参観授業と参加者数

担当教員名	参観授業名	実施日	参加人数
スモール	英語コミュニケーションⅡ	1 月 18 日(木)	3 名

平成 28 年度 センターの FD 委員が参加した参観授業

担当教員名	参観授業名	実施日
酒井 喜八郎	教育実践演習	1 月 17 日(火)
北村泰一	水辺環境論	1 月 18 日(水)
平岡直樹	都市企画論	1 月 20 日(金)

課題

センターの FD 委員、スモール、ブライアンは授業参観を 3 回して、センター会議でその経験を共有した。別の学科の先生はプレゼンと別にクイズ用紙を準備して授業を進めた。アクティブ・ラーニング式のディベートを学生に紹介する授業もあった。いろいろな工夫が参考になった。参加者として刺激が多くてより詳しく知りたい気持ちが残った。教育実習の参加型学習の話と、水辺環境と浸透性の考え方と、都市企画論と防災やグローバル化の話をたくさん続けて行きたい。それぞれの分野について「センス・オブ・ワンダー」と熱意を感じた。

参観授業に行ったら、教養センターの基礎的な英語の授業は別の分野の授業に上手く繋げることができるか考える。今のところリチャーズとギブソンの「絵で見る英語 Book 1」を主に使っているけど、将来に「Book 2」と「Book 3」も使えるようになったらそれぞれの学科の授業に繋がりやすくなる。

教育の授業を見たら、「Book 3」の最後のところが思い浮んだ：

6. FD講演会報告

FD推進委員会では、平成22年度から教員のFD活動に対する理解及びFD活動の推進のため、FD講演会を実施している。平成28年度においては下記の要領で講演会を開催した。

記

名称： 平成28年度 南九州大学 FD 講演会
日時： 2016年9月23日（金）
会場： 都城キャンパス＋宮崎キャンパス（テレビ会議方式）
講師： 北九州市立大学 地域創生学群 学群長 眞鍋和博 教授
演題： 「北九州市立大学のキャリア形成支援」
～キャリア教育をしないキャリア支援をめざして～
主催： 南九州大学FD推進委員会
共催： 南九州大学SD推進委員会

プログラム：

14：00～14：05	開会・講師紹介	FD推進委員会（委員長）
14：05～15：25	講演	北九州市立大学 地域創生学群 学群長 眞鍋和博 教授
15：25～15：30	御礼	寺原典彦 学長

講師紹介：

福岡県北九州市出身。1992年株式会社リクルート入社。企業の人材採用、高等教育機関の学生募集コンサルティングや、学生のキャリア形成プログラムの開発営業などを担当。2006年4月北九州市立大学キャリアセンター助教授就任。学生の就職活動支援に加えて、社会に出て活躍できる人材になるための能力・スキル開発を目的とした低学年からのプロジェクト型インターンシップのコーディネートや正課授業を実施。2009年4月からは、同大地域創生学群専任教員となり、実践力を身につけるための地域実習のコーディネートを担当し、プロジェクトマネージャーとして学生の教育にあたる。2013年4月より現職。また、We Love小倉協議会副会長など、地域活性化に向けた役割も担う。（北九州市立大学HPより）

概要：

学生がインターンシップなどを機会として積極的に地域活動の中に身を置き、課題解決プロジェクトなどに参加することを通じ、学び成長するという教育理念や成果の紹介が中心。地域から見ると、地域における「学生」の発見は地方創生のモデルのひとつともなる。持続可能な地域づ

くりに向けたシビックプライド醸成にも有効である。また、学生にとって、地域活動は「成長の場」であり、主体性を引き出す優れた機会となっている。眞鍋教授らにとっては、大学における「学びとは何か」に対する挑戦でもあるとのこと。

表 部門別参加者数 (人)

環境園芸学科	9
管理栄養学科	2
食品開発科学科	7
子ども教育学科	9
教養教職センター	2
宮崎キャンパス事務局	6
都城キャンパス事務局	10
計	45

アンケート集計結果

参加者数/在職者数： 45 名（44.1%）/102 名（教員 29 名/69 名・職員 16 名/33 名）

回答者数： 38 名（84.4%）

質問① 本講演を聴講し、満足しましたか？

（①満足した /35 名 ②どちらでもない /3 名 ③満足していない /0 名 ）

質問② 本講演の内容は、理解できましたか？（該当する番号に○をお書きください）

（①理解できた/37 名 ②どちらでもない/1 名 ③理解できなかった/0 名 ）

質問③ 本講演のような、FD 活動に関する講演会は、今後とも必要だと思いますか？

（①必要である/37 名 ②どちらでもない/1 名 ③必要ではない/0 名 ）

質問④ 今回のような FD 講演会を今後とも開催するとすれば、どのような時期にどのような内容の講演を期待されますか？

（時期）

- ・ 9 月末、後期の直前がよさそう。
- ・ 夏休みの時期で良いと思う。
- ・ 9～10 月。
- ・ 特にありません。今回のように後期を始める前で良いと思います。
- ・ 夏休み時期。同様の時期。この時期。現状が良い。
- ・ 授業の開始直前ではない方が良い。
- ・ 教員の休暇の時期とずらした方がよい（当然のように休む先生も少なくない）。
- ・ 9 月中。今年と同時期。この時期で良いと思います。現行が良いと思います。
- ・ 授業開始前、3 月下旬や 9 月下旬など。

- ・ 後期授業前夏休み期間中。
(8月中旬～9月下旬) 夏休みなど学生の長期休暇の時期。

(内容)

- ・ いろいろな授業法を知りたいので、その関係の講演会をお願いします。
講演後講師と討論する。今後の運営のヒントが得られる講演会を望む。
南九大とよく似た(サイズ・学科構成など)私立大学の事例をもっと聴きたい。
- ・ キャリア教育など。
- ・ 今回のような内容の講演会は初めてですが、非常に良かったと思います。
大学での様々な取り組み、学生を主体とした取り組みを知る機会になるので勉強になります。
- ・ 授業改善に関する研修
- ・ ICTの活用。ルーブリックの活用。
- ・ 他大学の先進的な取り組みについて知りたいです。
- ・ 今回と同様。地域と連携する大学運営、教育。大学と「環境にある地方の大学での先進的な取り組み。
- ・ 本学と同じような地方の私学の先生の講演など。
- ・ このような内容。今回のような地域貢献系に関心があります。
- ・ 公募制
- ・ 本学が後手に周っている取り組み事例。
現在のトレンドになっている取り組み事例。
- ・ 合理的配慮や必要な学生の対応。
- ・ FD活動の実態を知りたい(他大学の)。

質問⑤ その他、何かご意見・ご感想がありましたらお書きください。

- ・ 特定の大学の内容に偏りすぎていると感じた。もう少し一般化した内容であると、参加しやすいのではないか。ご自分の大学の手前味噌那話が多すぎると感じた。多様な大学があり、多様な学生がいるという前提に基づきFD活動について提言して頂ける内容が少しは聞きたかったと思う。
- ・ 学生の自立/教育・行動 言葉では生きた教育とは言うものの内容としては、学生の活動に任せているだけで、これが教育なのも考えさせられる問題。
技術研究系はスキルを定着させると言った重要な教育があると思う。"
- ・ 興味深い実践でした。ありがとうございました。
- ・ 今回の講演のような地域に密着した活動をしている大学を知れて良かったです。
- ・ 出席者が少ないのが残念。FD委員で有りながら欠席されている先生がいらっしやるのが残念
- ・ 講演内容は良かったが、内容が本学のFDとしては、すこしそのまま役立てる

のが難しいかもしれないと感じた。

- 多くのヒントがあったと思います。地域学？の理解が出来ました。
- ありがとうございました。
- 活動の多さに驚いた大変刺激を受けた、元リクルートの人は今後も注目です。

7. 新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査報告

平成 24 年度からの新規事業として「新入生魅力度調査・卒業生満足度調査」を実施した。平成 27 年度より、卒業生満足度調査を卒業予定者満足度調査と呼び方を変更した。

以下に管理栄養学科以外の学科の設問を示す(魅力度調査の設問を示す。満足度調査の場合は「魅力を感じていますか」が「満足しましたか」になる。)

(1) 環境園芸学科の新入生魅力度調査報告

123 人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

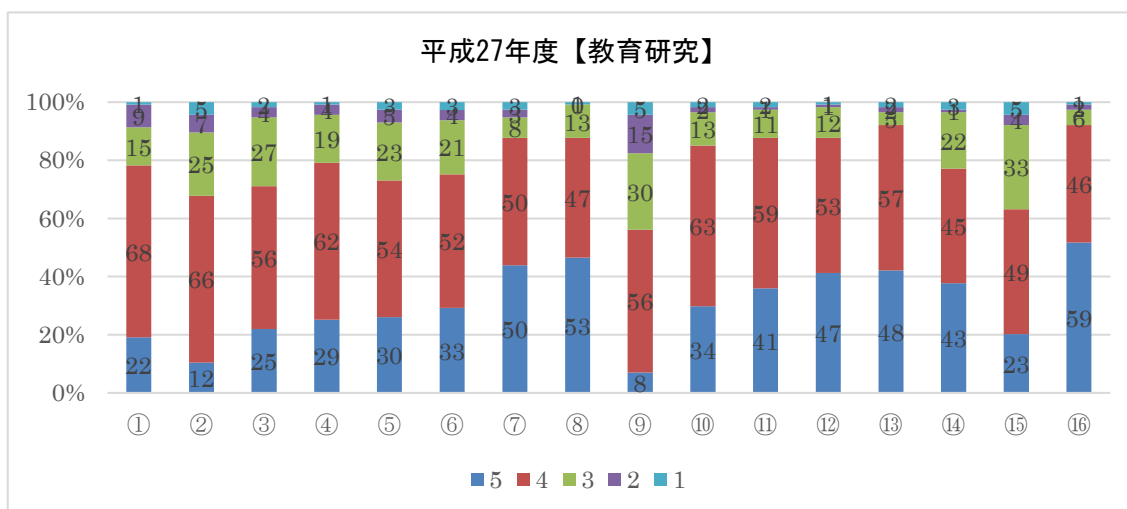
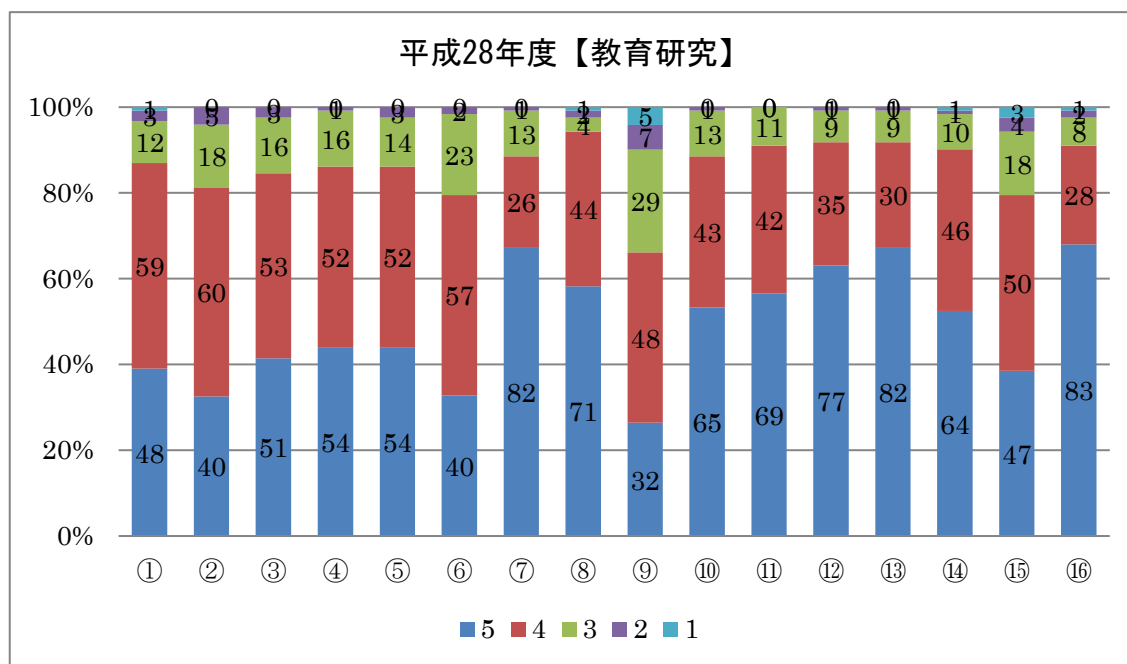
※ ちなみに設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が 123 人にならない場合がある。

※ 5 段階 (5 : 特に魅力を感じている 4 : 多少魅力を感じている 3 : どちらでもない 2 : あまり魅力を感じない 1 : まったく魅力を感じない) で評価している。

1) 教育研究について

【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6つの専攻(園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス)を設けていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。



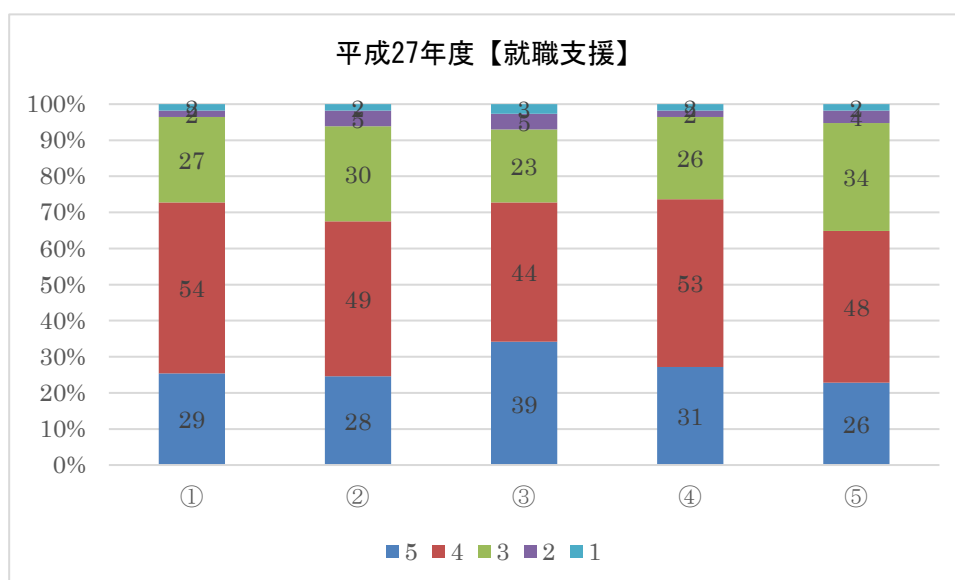
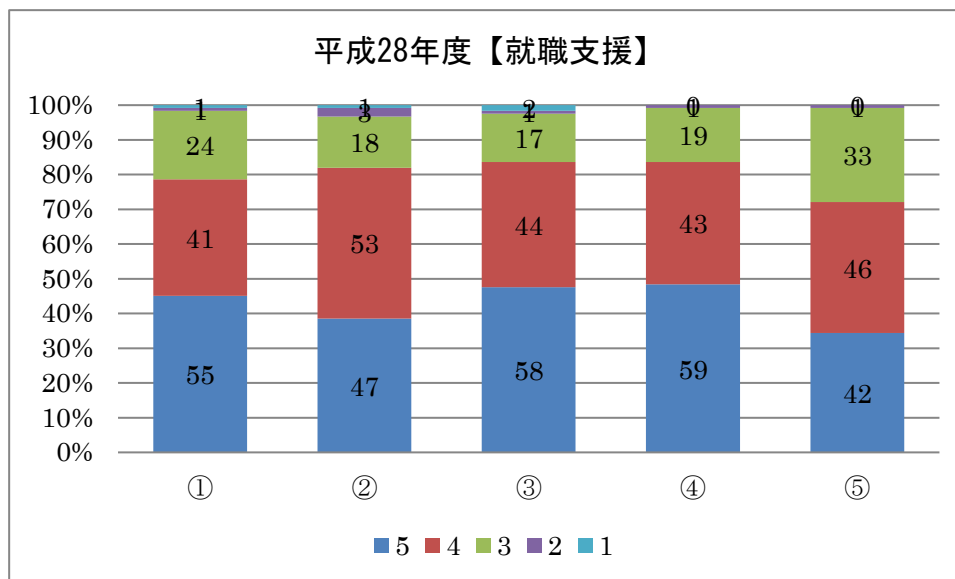
昨年度より満足度が高い傾向がみられる。全体的にみると全ての設問で新入生のほぼ 6 割以上が魅力を感じていると答えており、本学ならびに環境園芸学科の教育研究理念やカリキュラムに受験生に対する一定の訴求力があり、新入生はそれに期待しているものと考えられる。

昨年度と同じく、全設問の中で設問⑨（教養教育科目の設置）が最も魅力度が低い。環境園芸概論など通し、入学後早い段階で新入生全員に教養教育科目の重要性・位置づけを理解させることも必要であると考えられる。

2) 就職支援について

【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「“就職課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

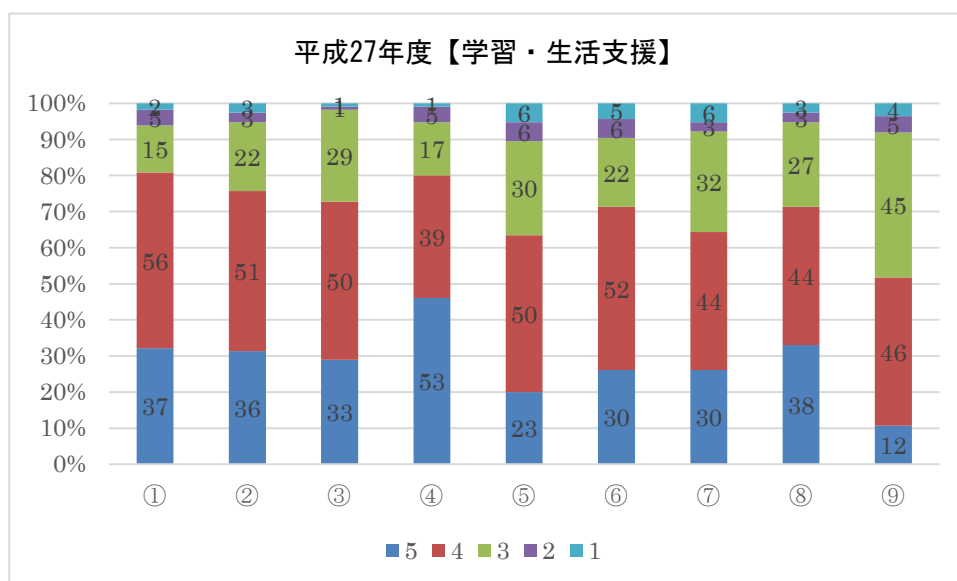
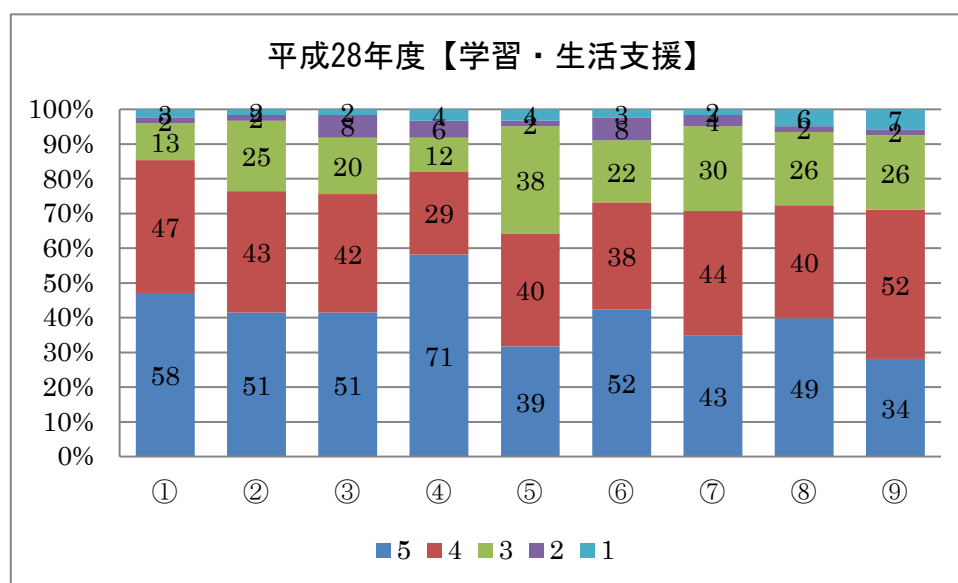


昨年度と同傾向であった。就職支援について新入生の 6 割以上が魅力を感じていると答えているが、現時点で具体的に就職活動は行っていないと考えられる。同じ年代の学生に対する調査ではないが卒業生満足度調査では、就職支援の不足傾向が結果として現れていることから、具体的にどのような支援が必要であるか調査・分析が必要であると思われる。

3) 学習・生活支援について

【学習・生活支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、校友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。



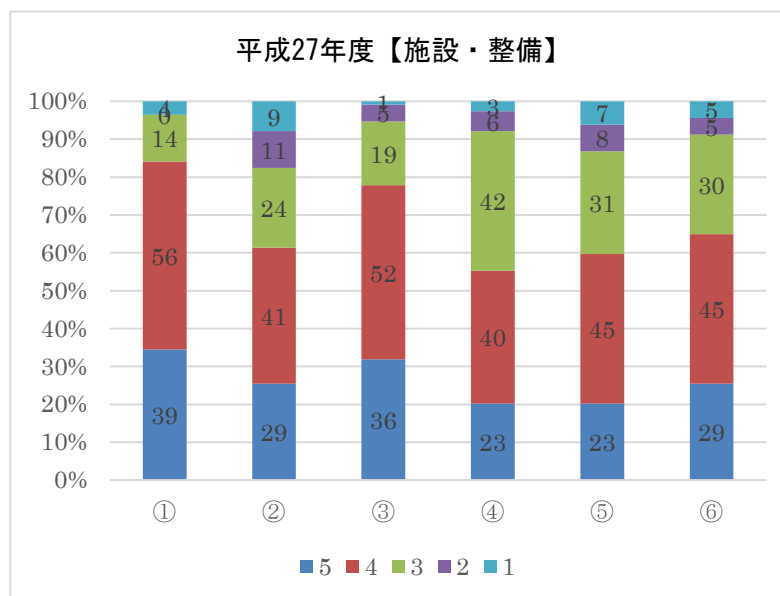
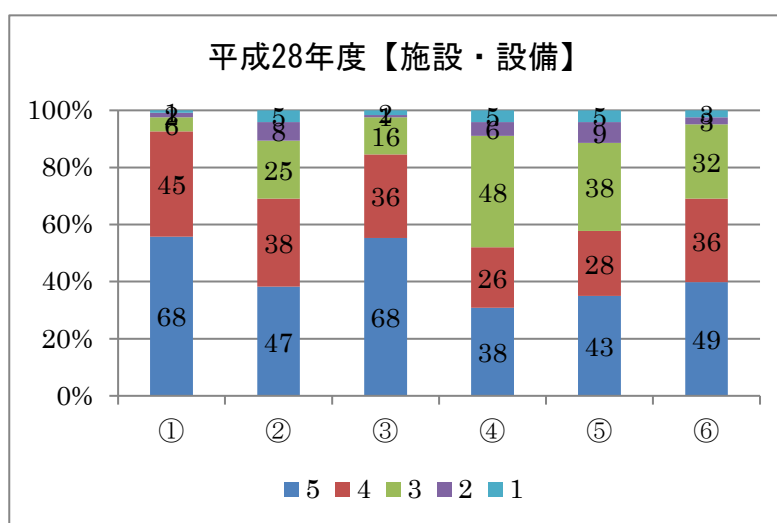
設問①～⑨で6割以上が魅力を感じており、一定の学習・生活支援に対する期待感が伺えられる。

ただし、昨年度に引き続き、設問⑨「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」が最もポイントが低かった。担任制度の有効性が入学当時には理解されていないことがその原因の一つとも考えられる。

4) 施設・設備について

【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）」が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。



昨年度とほとんど同様な傾向であった。キャンパスの施設・設備についても概ね好印象を頂いていると思われる。

5. 全体を通して

全体として昨年度と結果はよく似ていた。大きな変化がない限り、この傾向は変わらないのかもしれない。調査した各設問に対して、あまりあるいは全く魅力を感じないとの回答「1、2」は概ね1割前後であり、本学並びに本学科の教育研究、就職支援、学習・生活支援および施設・設備は新入生の多くに魅力あるものになっていることが示された。この高い魅力度を高い満足度に維持・向上に繋げる取り組みが重要であると思われる。

また、新入生（高校生）のニーズは変化するものと考えられることから、今後、時代に即した対応も必要であると考えられる。

(2) 環境園芸学科の卒業予定者満足度調査報告

96人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

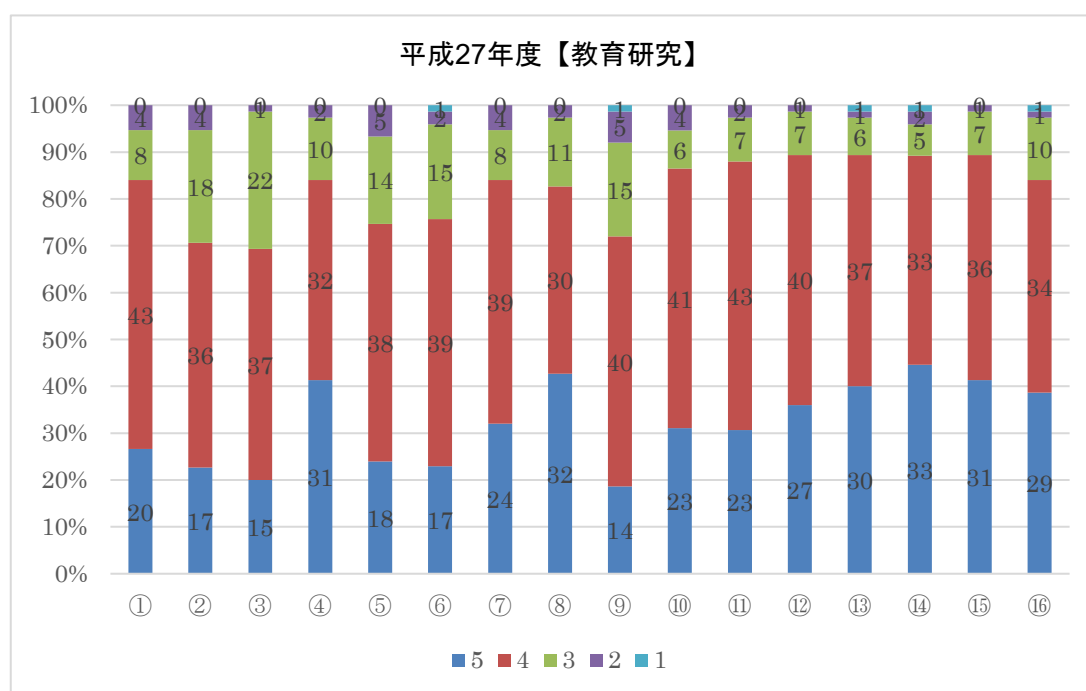
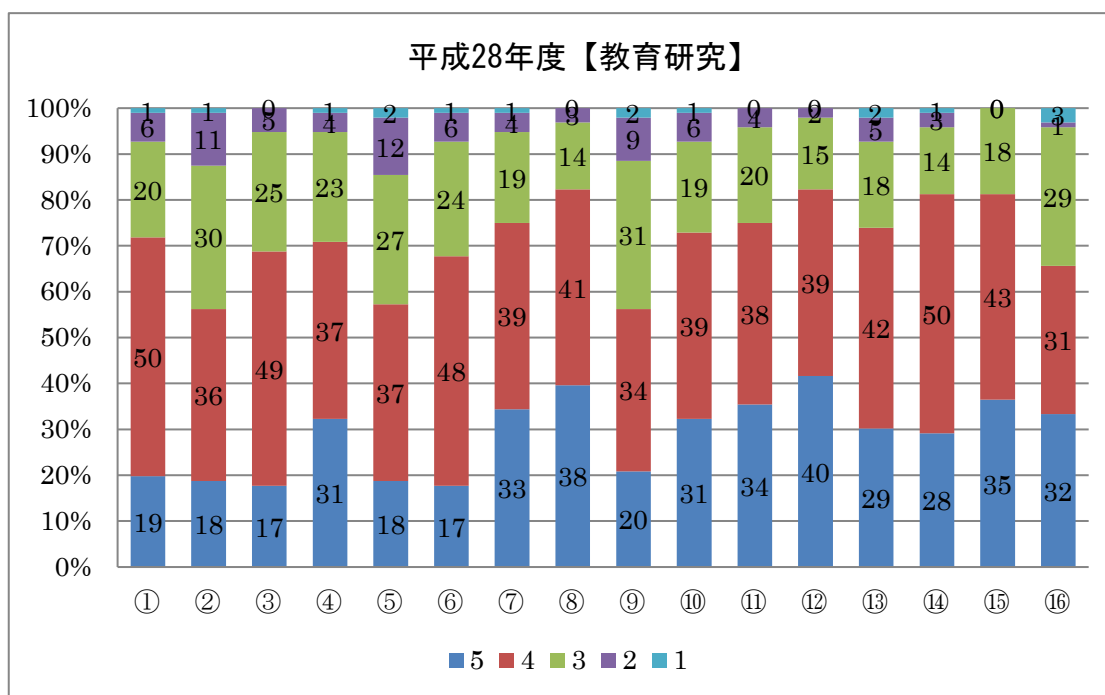
※ ちなみに設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が96人にならない場合がある。

※ 5段階（5：特に満足している 4：多少満足している 3：どちらでもない 2：あまり満足していない 1：まったく満足していない）で評価している。

1) 教育研究について

【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめる、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつA5B6つなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6つの専攻（園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス）を設けていることにどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度満足しましたか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。



頻度分布グラフを見ると、16 設問すべての設問で、半数以上の学生が満足（4 以上）と回答しており、満足していない（2 以下）と回答した学生は 15%以下と概ね良好な値を示している。しかし、昨年度に比れば低評価となった。今年度、満足（4 以上）と回答した学生の割合が最も低かったのは、昨年度と同様に設問⑨『教養教育科目の設置』であった。

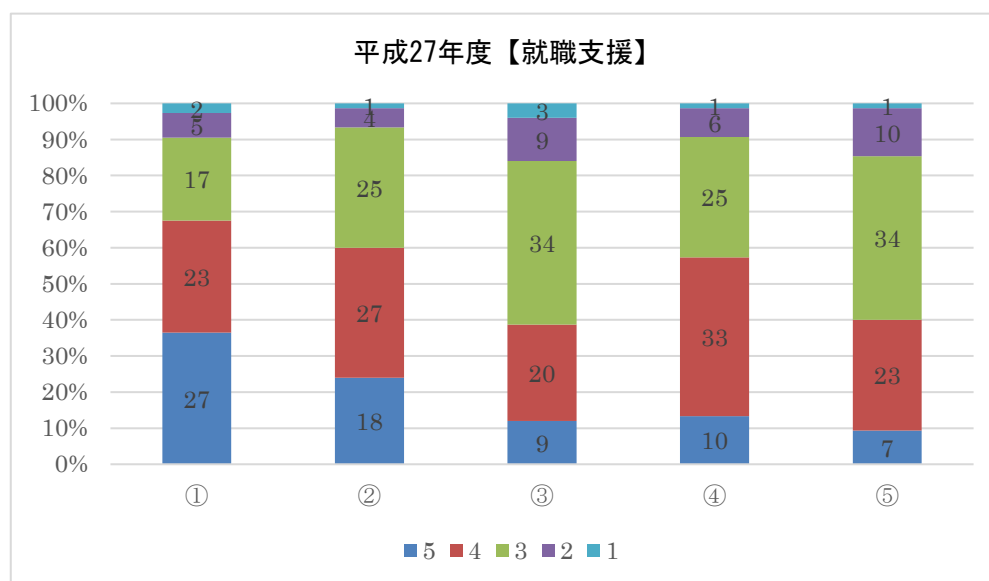
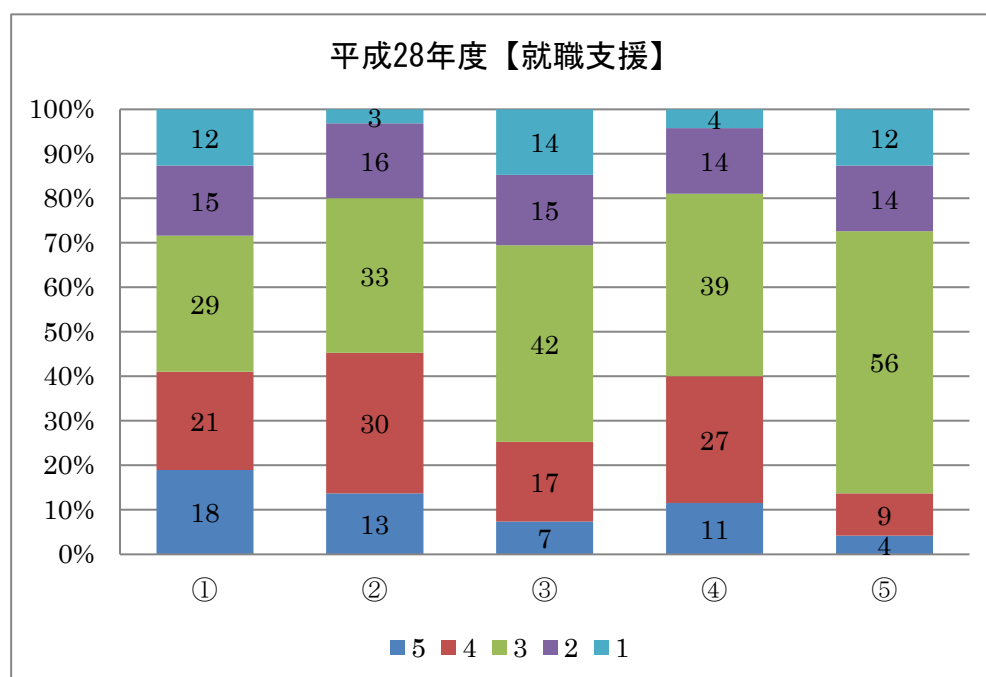
これらの結果から、本学科の学生は概ね満足（4 以上）しているものの、「教養教育科目」よりも「専門科目」に高い関心を持っていることが示唆された。それに関連する設問⑪～⑮では、満足（4 以上）と回答した学生が 9 割弱であり、昨年度よりも高い満足度が得られているように見え、この

傾向が強くなっていく可能性もある。今後、学生への「教養教育科目」の重要性の理解や在り方、「教養教育科目」と「専門教育科目」のバランス（専門の特化も含め）などについての検討が課題として考えられる。

2) 就職支援について

【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援してくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関するセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。



昨年度より、設問①～⑤すべてで満足（4以上）と回答した割合が減少した。特にインターンシッ

プの制度についての不満足度が高くなった。

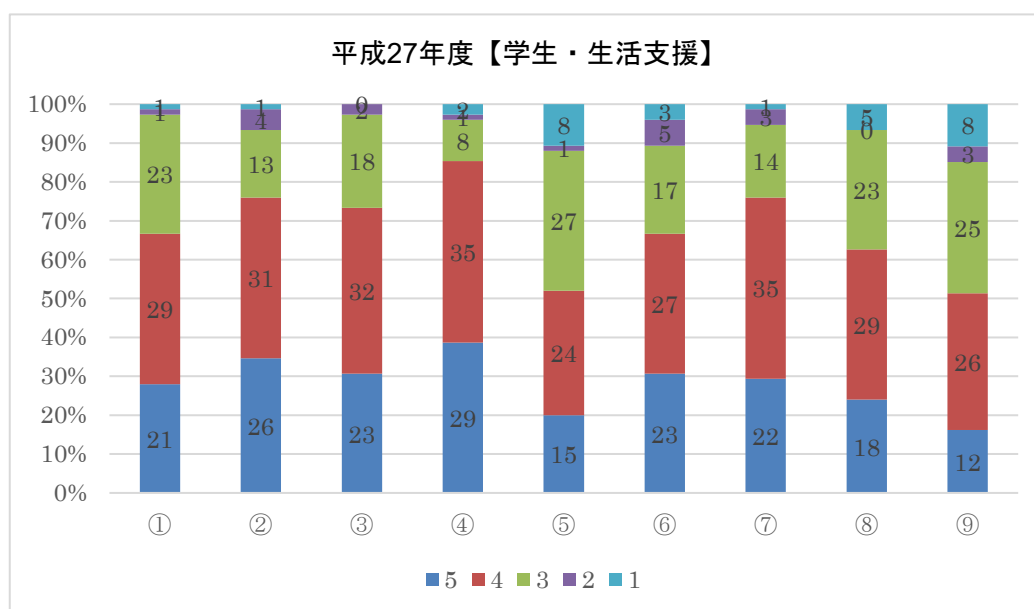
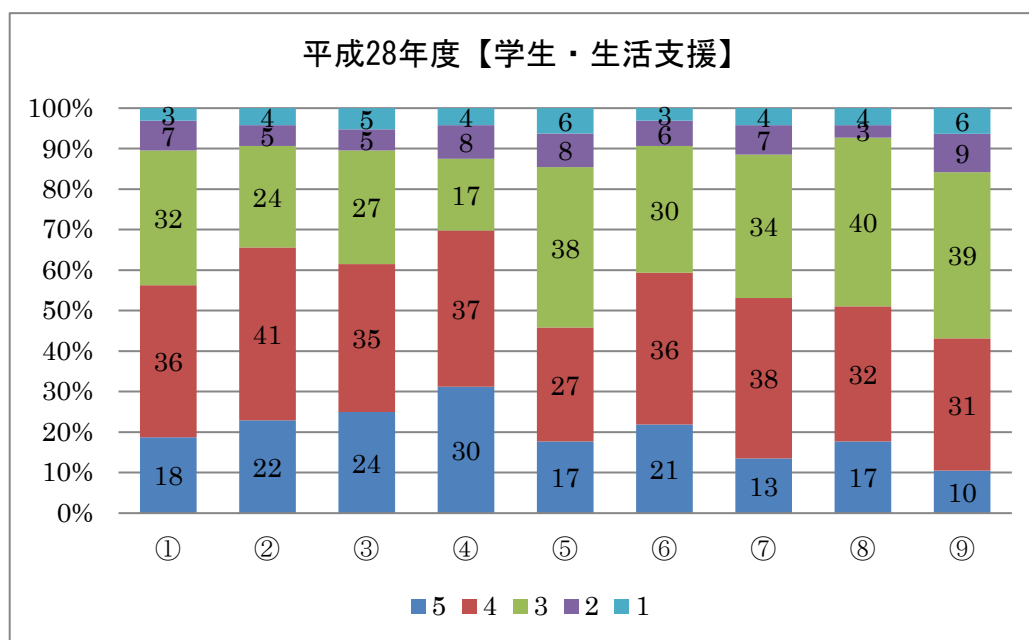
設問③「地元へのUターン就職」については、満足（4以上）が4割弱と低評価であるのは、本学科の学生は全国から集まっていること、地元でUターン就職しない学生が多いこと、学生の就職活動開始が遅いことなどが要因として考えられる。いずれにしても早期に地元でどのような就職先（企業・役場・団体など）があり、それらの求人や採用試験の情報収集と対応が重要であることを就職課と連携を取り学生に指導していく必要があると考えられる。

説問⑤『インターンシップ制度』についての、満足（4以上）が低いことから、就職課および学科として充実を検討して、その内容・取組みについての学生へのさらなる周知が必要であると考えられる。

3) 学習・生活支援について

【学習・生活支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関するの悩み相談をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかってくれている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。



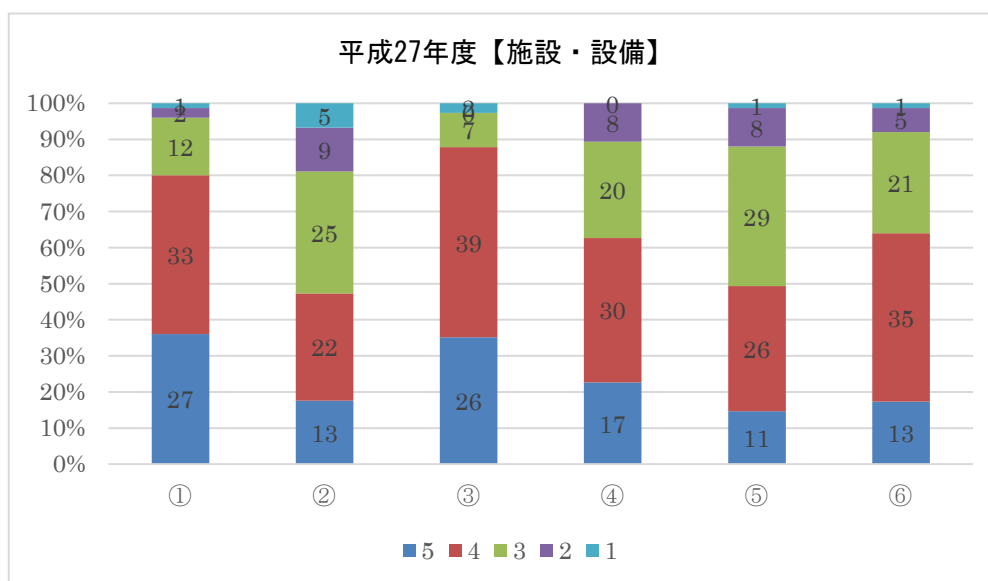
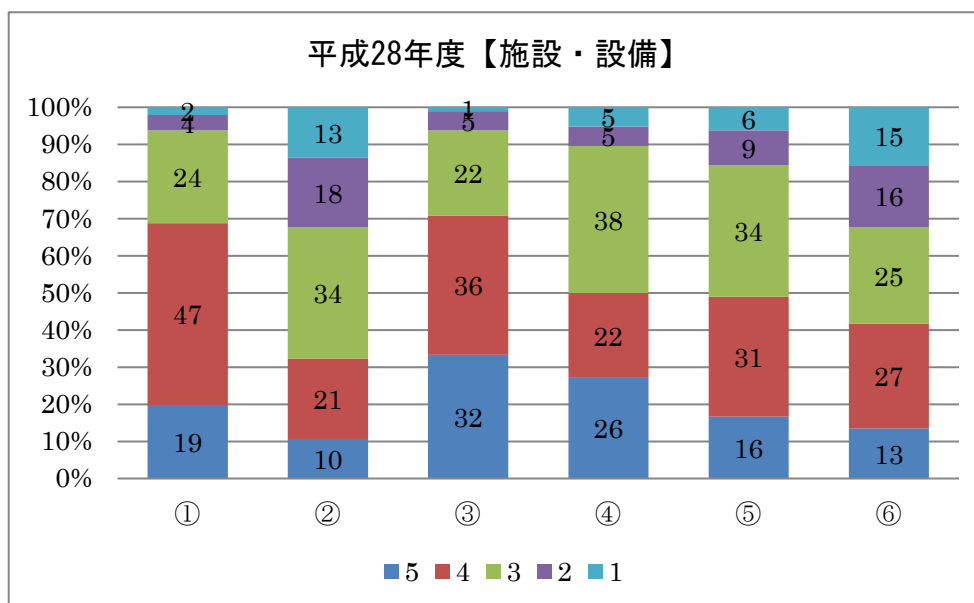
昨年度と比較して、全体的傾向として、満足（4以上）と回答した割合が減少していた。内容として、70%程度が満足と回答したのは設問④「生協売店・食堂の充実」の1項目だけであった。

設問⑤「下宿生を対象にした住居の斡旋」と設問⑨「担任制度」については、50%以下であり、対策を検討する必要がある。設問⑤では、下宿施設が近隣にない実態があり、全学的な問題として対策を検討していく必要がある。設問⑨については、本学科では3年前期までは学年ごとに4人の教員が、3年後期の研究室配属後はその研究室の教員が担任として指導に当たっているが、研究室配属後の教員を担任として考えて回答していない可能性があり、設問を修正することにより、満足度が上がる可能性がある。

4) 施設・設備について

【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度満足しましたか。



昨年度と比較して、設問⑤以外の設問はすべて満足（4以上）と回答した割合が減少していた。内容として、70%程度が満足と回答したのは設問①「研究・実習用の設備・環境」と設問③「快適な校舎」の2項目であった。これらの項目は概ね高評価であるが、さらなる充実を図っていく必要がある。

その中で、設問②「インターネット環境の充実」と設問⑤「運動施設・サークル活動の支援施設」については、低評価であり、対策を検討する必要がある。設問②については、Wi-Fi環境の充実など

が望まれる。ただし、この設問②と設問⑤については、全学的な問題として対策を検討していく必要がある。

(3) 管理栄養学科の新入生魅力度調査報告

【教育研究に対する質問】

- ・ 質問①から⑤までが「南九州大学」の教育研究の理念等に対する魅力度調査であり、質問⑥から⑮までが「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度調査であった。
- ・ 質問③の質問内容に対して、8割以上が4あるいは5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)に回答していることから、南九州大学の「食・緑・人」に関する研究、人材育成に魅力を感じ期待を持って入学してきていることが分かった。
- ・ 管理栄養学科における教育研究に対する質問に対しては、⑦から⑮の質問で平均値が4.0以上となっていることから、「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度が高い傾向であることが分かった。その中で⑧と⑩の質問項目では前年同様数値が高かったことから、引き続き管理栄養学科で食や栄養に関する科目以外に特に「緑」にかかわる授業科目が設けられていることに魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問⑭においても平均値が4.47と高い数値であった。研究室配属、その後の卒業研究に興味を抱いていることが分かった。

【就職支援に対する質問】

- ・ 就職支援に対する魅力度については、質問②以外で平均値が4.0以上となっていることから、就職支援に対する南九州大学の体制が整っていることがうかがえる。
- ・ 質問②で平均値が3.92と他の質問に比べ数値がやや低い傾向にあった。管理栄養士という専門職で医療現場や施設等での就職が多いため、今後講座というよりは現場で働く管理栄養士の話を聞けるような機会を増やしていく必要があると考える。
- ・ 質問③で「Uターン就職」に関する質問があるが、管理栄養学科は宮崎県内出身者の多い学科であることから、「宮崎県内の地元就職に対する魅力度」について質問を設けてもいいかもしれない。

【学習・生活支援に対する質問】

- ・ 質問①の学生支援に関しての質問には魅力度が高く、同時に質問②④で8割以上が4あるいは5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)に回答していることから、南九州大学の図書館や生協売店および生協食堂などが充実していることにより、学習・生活支援に対する体制やサポートに魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問⑥⑦で昨年と比較して平均値が下がり、4.0を下回っていたが、7割以上が4あるいは5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)に回答していることから、おおむね南九州大学の課外活動や学校行事に魅力を感じていると思われるが、積極的な参加への呼びかけ

なども必要かと考える。

- ・ 質問⑤についてはどちらでもないとの回答が最も多かった。管理栄養学科では地元宮崎県出身者が多いため、このような結果となったと考えられる。しかし、そのほかには 4 あるいは 5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)の回答数が多かったことから、他県からの学生は、比較的魅力があると感じていると思われる。

【施設・設備に対する質問】

- ・ 質問②⑤で平均値がいずれも 3.92 でその他はすべて 4.0 以上となっていることから、南九州大学における施設・設備におおむね魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問②では平均値が昨年同様 4.0 以下であることからインターネット環境、特に Wi-Fi 環境の充実も必要かと思われる。
- ・ 管理栄養学科が設置されている宮崎キャンパスは開設 10 年強と比較的新しいキャンパスであることから、質問①と③の質問で昨年同様、魅力度が高いことが分かった。また質問⑥でも数値が高くなっていることから、「休憩時間中にすごせる憩いの場」については魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問④では通学に関して、地元宮崎県出身の多い管理栄養学科の新入生にとっては、駅と本学を結ぶスクールバスや車で通うための駐車場が完備しているところに魅力を感じていることが分かった。

(4) 管理栄養学科の卒業生満足度調査報告

【教育研究に対する質問】

- ・ まず質問①の平均値が 4.03 であったことから、南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めたことに満足していることが分かった。
- ・ 特に管理栄養学科の教育研究に対する質問に対しては、質問⑧の「栄養士および管理栄養士国家試験受験資格の取得」、質問⑩の「現場で職業体験ができる臨地・校外実習がカリキュラムに組み込まれていること」、質問⑪の「現場を知る教授陣から学べる」、質問⑫の「地元宮崎に貢献できる管理栄養士の人材育成」、質問⑭の「管理栄養士国家試験合格に向けた国試対策」、質問⑮の「充実した研究室の所有」で、平均値が 4.00 から 4.45 と高い数値となっていたことから、管理栄養学科での管理栄養士という専門職で社会に貢献できる人材育成教育に満足していることが分かった。
- ・ 本年度の「国試対策」に対する満足度の質問⑭では平均値が 4.17 となっており、8 割以上が 4 あるいは 5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)に回答していることから、管理栄養学科の「国試対策」に対して満足していることが分かった。次年度以降もこの数値を維持できるよう、更なる努力が必要である。
- ・ 「研究」等の質問である⑤の満足度よりも「現場で職業体験ができる」等の質問である⑩で平均値が高い理由として学生たちは最先端の研究よりも技術習得に力を入れたいと考えて

おり、満足度が上がっているのではないかと考えられる。

【就職支援に対する質問】

- ・ ほとんどの質問項目において「多少満足している」と「どちらでもない」が高く、就職支援に対して満足度が低いことが分かった。管理栄養学科の場合は専門職であるため、多学科と就職活動の進め方が異なることから、このような結果になったと思われる。
- ・ 質問③の「地元へのUターン就職へのサポート」に対しては半数以上が3(どちらでもない)に回答しており、宮崎県内出身者が多いことが原因と考えられる。ただし、そのほかは4あるいは5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)の回答数が多いことから、他県からの学生は、比較的満足しているのではないかとと思われる。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後質問内容についても検討が必要と思われる。
- ・ 質問⑤の「インターンシップ制度の充実」に対して半数以上が3(どちらでもない)に回答し、回答も分散していることから、本学科ではインターンシップ制度を殆ど利用していないため、このような結果となったと思われる。この質問に関しても今後質問内容について検討が必要と思われる。

【学習・生活支援に対する質問】

- ・ 質問②の図書館、質問④の生協売店・生協食堂の学生生活の支援に対して、平均値が4.0以上であったことから、学生にとって学生生活を送るうえで、日頃よく利用する場については満足度の高いものであることが分かった。保健室、学生相談に関する質問③について今年度は前年度よりも平均値が下がっており、3のどちらでもないと回答するものが多くみられた。学年により、使用頻度が異なってくるためこのような結果であったと考えられる。
- ・ 特に平均値が低かった質問⑤は下宿の斡旋に関するもので、回答が3の「どちらでもない」が半数以上を占めていた。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後は質問内容についても検討が必要と思われる。
- ・ その他の質問項目でほとんど平均値が3.50前後であったことから、おおむね満足していると思われる。

【施設・設備に対する質問】

- ・ すべての質問項目で平均値が3.5以上であったことから、南九州大学の施設・設備に対しておおむね満足していると思われる。特に質問③の平均値が昨年に引き続き4.51と高かったことから、「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点に大いに満足していることが分かった。学生にとって清潔できれいな校舎は魅力度調査においても数値が高かったことから、今後も施設・設備の維持、充実に努めていく必要がある。

(5) 食品開発科学科の新入生魅力度調査報告

[教育研究に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは食品開発科学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか？
- ⑦あなたは食品開発科学科が、食品の開発・製造(美味しくつくること)に携わる専門家を育成するための教育研究を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは食品開発科学科が、付属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨あなたは食品開発学科が、1 年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑩あなたは食品開発学科が、1 年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑪あなたは食品開発学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑫あなたは食品開発学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑬あなたは食品開発学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑭あなたは食品開発学科が、3 年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑮あなたは食品開発学科が、4 年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度魅力を感じていますか。

【設問】																
5	特に魅力を感じている	3	1	4	4	3	1	6	6	5	2	3	2	5	4	3
4	多少魅力を感じている	5	9	15	9	11	13	13	10	9	13	13	6	12	12	14
3	どちらでもない	11	10	4	8	7	9	4	7	9	8	6	14	6	6	6
2	あまり魅力を感じない	4	3	0	2	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
1	まったく魅力を感じていない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	未回答															

設問①から⑤まで大半の学生が魅力を感じているという結果が得られ、学科の方向性は適切であると言える。また、設問①から⑤まで「まったく魅力を感じていない」と回答した学生はわずか1名（前年は34名）であり、大幅に改善されたことがわかる。

学科のカリキュラムについても大半の学生が魅力を感じているようで、この点についても学科の方針は適切と思われる。しかし、そうではない学生も皆無ではないので、この点に関しても今後改善していくことが必要と思われる。

[就職支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【就職支援に対する質問】		①	②	③	④	⑤
5	特に魅力を感じている	3	1	1	0	0
4	多少魅力を感じている	10	8	12	13	9
3	どちらでもない	10	12	9	8	12
2	あまり魅力を感じない	0	0	1	0	2
1	まったく魅力を感じていない	0	2	0	2	0
	未回答					

半数以上の学生が「魅力を感じている」と回答しているので、今後も継続して期待に応えられるようにする必要

がある。また、「どちらでもない」以下の回答をした学生が 5 名いるので、この点に対しても原因の究明と改善が必要である。

[学習・生活支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「“学生支援課”があり、当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「“保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「“生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、学友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。

【学習・生活支援に対する質問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5	特に魅力を感じている	5	5	4	10	2	2	7	5	2
4	多少魅力を感じている	12	9	10	8	7	10	8	8	8
3	どちらでもない	5	7	6	4	12	10	6	8	10
2	あまり魅力を感じない	0	1	2	0	0	0	1	1	0
1	まったく魅力を感じていない	0	0	0	0	1	0	0	0	2
	未回答	1	1	1	1	1	1	1	1	1

ほとんどの学生が「魅力を感じている」と回答しているので、さらに期待に応えられるようにしていく必要がある。また、「どちらでもない」以下の回答をした学生もかなり存在するので、この点に対しても原因究明と改善が必要である。

[施設・設備に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室(フィールドセンターを含む)が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている(学内LANの充実、情報処理室の充実

等)」点にどの程度魅力を感じていますか。

③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。

④あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。

⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設(クラブハウス)が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場(食堂・中庭・学生ラウンジ等)が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【施設・設備に対する質問】		①	②	③	④	⑤	⑥
5	特に魅力を感じている	1	2	4	4	1	4
4	多少魅力を感じている	12	10	13	9	11	10
3	どちらでもない	8	10	5	9	10	8
2	あまり魅力を感じない	1	0	0	0	0	0
1	まったく魅力を感じていない	0	0	0	0	0	0
	未回答	1	1	1	1	1	1

ほとんどの学生が魅力を感じていると回答しており、ある程度期待に添えていると思われる。しかしながら、すべての質問項目に関して「どちらでもない」という回答もかなり多く見られたので、原因の究明と改善を行う必要がある。

(6) 食品開発科学科の卒業予定者満足度調査報告

[教育研究に対する設問]

①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。

②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力をもった教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。

⑥あなたは食品健康学科が、食品製造者と消費者の両方の視点、および食に関する科学的知識と倫理を身につけた食品のスペシャリストを養成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。

⑦あなたは食品健康学科が、食品の開発・製造(美味しくつくること)に携わる専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。

⑧あなたは食品健康学科が、食品の適正利用(正しく食べること)の専門家を育成する目的で教育・研究を

行っていることにどの程度満足しましたか。

⑨あなたは食品健康学科が、食品の衛生(安全を守る)・機能性(体調調節)の専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。

⑩あなたは食品健康学科が、講義に加えて、実験・実習・学外インターンシップなどの授業を多く設置し、実践的能力を身につけるための教育を行っていることにどの程度満足しましたか。

⑪あなたは食品健康学科において、フードサイエンスの基礎科目から食品の衛生・機能性に関する基幹科目、食品の開発・製造および食品の適正利用に関する実学科目に至るまで体系的に組まれたカリキュラムに従って履修できることに、どの程度満足しましたか。

⑫あなたは食品健康学科において、1～3年次に学んだ食品開発および食品利用のあり方を集約して、4年次に卒業論文、専攻演習に取り組むことができることにどの程度満足しましたか。

⑬あなたは食品健康学科において、食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

⑭あなたは食品健康学科において、高等学校教諭1種(農業・理科)、中学校教諭1種(理科)の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

⑮あなたは食品健康学科において、フードスペシャリスト、健康食品管理士を始め、他の食品関連資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

【教育研究に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
5	特に満足している	1	2	5	6	3	3	5	3	4	4	3	8	8	6	8
4	多少満足している	19	13	14	12	11	18	15	19	17	15	16	10	16	7	16
3	どちらでもない	6	7	4	7	7	4	5	3	4	8	4	7	3	12	2
2	あまり満足していない	1	4	2	1	5	2	0	2	2	0	3	2	0	0	0
1	まったく満足していない	0	1	2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
	未回答							1				1			1	1

設問①から⑮まで大半の学生の満足度は高いと感じられる。しかし、教職に関連する設問⑭で否定的な学生が14人もおり、さらなる改善が必要と思われる。

[就職支援に対する設問]

①あなたは南九州大学の「“就職課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

②あなた南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。

か。

⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【就職支援に対する設問】		①	②	③	④	⑤
5	特に満足している	1	1	0	0	0
4	多少満足している	14	17	12	11	9
3	どちらでもない	6	3	8	7	10
2	あまり満足していない	3	4	2	6	6
1	まったく満足していない	3	2	4	3	2
	未回答			1		

設問①から⑤までで、「特に満足している」、「多少満足している」と回答した学生の割合は高いとはいえるが、そう考えていない学生も多数いるので、さらに改善していく必要性を感じる。

[学習・生活支援に対する設問]

①あなたは南九州大学の「“学生支援課”があり当該課の専門スタッフが学習支援(各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等)をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「“保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「“生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。

⑥あなたは南九州大学の「課外活動(部活動、学友会、学祭実行委員会等)が充実していて楽しく思い出に残る学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。

⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事(大学祭等)が行われている」点にどの程度満足しましたか。

⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。

⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

【学習・生活支援に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5	特に満足している	2	0	2	3	1	1	2	4	5
4	多少満足している	14	15	12	15	7	12	11	10	14
3	どちらでもない	5	11	9	5	10	11	9	11	5
2	あまり満足していない	4	0	3	0	2	0	2	0	1

1	まったく満足していない	1	0	0	3	5	1	2	0	1
	未回答	1	1	1	1	2	2	1	2	1

設問①から⑨まで大半の学生が満足を示している。しかし、「どちらでもない」、「あまり満足していない」、「まったく満足していない」、「未回答」とした学生の数もかなり多く、さらに改善が必要と思われる。

[施設・設備に対する設問]

①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」点にどの程度満足しましたか。

②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内 LAN の充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度満足しましたか。

⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【施設・設備に対する設問】		①	②	③	④	⑤	⑥
5	特に満足している	1	4	6	5	2	3
4	多少満足している	11	14	15	11	11	11
3	どちらでもない	8	5	5	6	7	8
2	あまり満足していない	4	3	0	3	1	2
1	まったく満足していない	3	1	1	2	6	3

どの設問に対しても、「特に満足している」と「多少満足している」と回答した学生が一定数いるが、それ以外の解答をした学生もかなりの数いる。次は、このような否定的な回答をした学生数をいかに減らすかということを課題として取り組む必要がある。

(7) 子ども教育学科の新入生魅力度調査報告

(新入生 58 名が回答)

【教育研究に対する設問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、「附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育」であった。次には「6つの専攻（園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス）を設けている」の項目、その次には、「1年次に人間性と社会性豊かな教養を身に着けるための「教養教育科目」を設置している」、「1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置している」、「4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしている」の3項目が同じポイントであった。以上を鑑みるに、新入生にあっては、専門教育や実学教育に魅力を感じて

いると言えよう。

【就職支援に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、「”就職課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」であった。「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」については、少しポイントは低くなるが、設問の5項目については僅差であった。評価者が、大学に入学して間もないということもあり、就職支援を実感する機会が少ないためであるととらえることもできる。

【学習・生活支援に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの高い項目は、最も高かったのが「”生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかってくれている」、次に「”学生支援課”があり当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」、その次に「”保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」であった。総合的にみて、学生生活に密着している項目が、ポイントが高くなっているととらえることができよう。

【施設・設備に対する質問】

「特に魅力を感じている」のポイントの最も高い項目は、「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」、次に「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており、通学に便利である」、その次に「「休憩時間中にすごせる憩いの場」が充実している」であり、以上の3項目については、ポイントとしては4.0以上であった。平均値が3点台の項目としては、「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」が3.93、「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」が3.81、「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」がポイントとしては、3.79であった。

(8) 子ども教育学科の卒業予定者満足度調査報告

（卒業予定者 58 名が回答）

【教育研究に対する設問】

平均値が4.0ポイント以上の項目が15項目中5項目あり、最も高かったのが「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境で勉学に励める」の項目と、「三つの資格・免許を取得できること」の2項目であった。次に「ボランティア活動」、その次に「人の育ちと地域の育ちを支援する専門家」、「「子どもの心身」「地域と子ども」「自然環境」という学びの3つの特色を育てる」であった。3.7以上には「小学校・幼稚園とつながって、恒常的に現場で学ぶことができる連携学校園方式」、「4年間の学びを教員がきめ細かにサポートする、ホーム制や1年次後期から始まる少人数のゼミ」、「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」、「「夢を叶える塾」での就職試験対策など、手厚い進路サポートがある」、「「子どもの学び研究所」「子育て支援センター」「環境教育センター」という学外に開かれた3つの活動拠点を有している」であった。

【就職支援に対する質問】

平均値が4.0ポイント以上の項目はなく、どの項目も3ポイント台であった。そうした中、「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」、「”就職

課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」が比較的ポイントが高かった。

【学習・生活支援に対する質問】

平均値が4.0ポイントの項目は、「”生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかっている」であった。「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館」、「”保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」、

「”学生支援課”があり当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」、「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」等は3.8ポイント以上であり、専門スタッフのサポート体制は学生が大学生活を送る上で心強いものとして実感されていると言えよう。

【施設・設備に対する質問】

平均値が最も高かったのは、「清潔で機能的、快適な校舎」で4.24であった。次いで「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており、通学に便利である」が、3.90であった。「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設」が3.76、「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」が3.72のポイントであった。

8. 学科・センター・大学院の FD 活動報告

(1) 環境園芸学科

1. 保護者懇談会の開催

保護者（全学年）から学科および都城事務部に対する意見を頂く場として、年 1 回保護者懇談会を開催している。今年度は 12 月 3 日(土)に開催し、まずは教員ならびに学科の活動紹介等を行った。また今年度は、昨年度に引き続き外部講師を招いての就職活動におけるガイダンスを行った。最近の就職の動向やこれからのスケジュール等の説明があり、保護者から大変役に立ち、有意義であったと概ね好評であった。

また、全体での懇談会後、個人面談を希望する保護者に対しては、1・2 年生は学年担当、3・4 年生は研究室指導教員等が個別に面談し質問・意見に対応した。

2. 学生指導について

環境園芸学科の在学生の出身地は全国にわたり、一人暮らしをしている学生も少なくないため、日頃よりきめ細やかな対応を心掛けている。本学科では、学生の学習や進路、日常生活等の相談に応じるために、各学年担当の教員を配置している。学年持ち上がり方式をとっており、入学から、通常 3 年生後期に研究室に所属となり指導教員の元に学習活動を開始するまでの 2 年半の間、同じ教員が学生の諸問題に対応している。

1) 1 年生への指導

担当教員 4 人と学生部員、学生支援課、学生相談室等の教職員を交えて、1 年生全体の状況を把握するために月 1 回程度の定例ミーティングを行っている。必修授業の連続欠席、体調不良、悩みを抱える学生を早期に把握するとともに、指導方法とその対応策を協議し実行した。また適時、定例学科会議で報告して学生情報を共有し、学科教員への協力を依頼した。

保護者に、班ごとの担当教員、編入生対応教員、学科長、学生支援課、保健室、女子対応教員等の連絡先（メールアドレス、電話番号）を文書で連絡した。オリエンテーション時に、各班約 5～7 人程度ずつで集合写真を撮影し、顔と名前が一致するような資料を作成した。欠席がちな学生については、身体的、精神的、家庭的にどのような特徴があるかを把握し、授業への参加を促す連絡を行った。親に連絡をしたり、機会があればできるだけ本人に話しかけるようにした。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて来年度初めに所属する分野が決まった。

2) 2 年生への指導

担任教員 4 人と、学生相談に関わる教職員を交えて月 1 回の定例ミーティングを行った。学業不振や悩みを抱える学生を早期に見つけるとともに、指導方法を協議して適宜対応策を講じた。また、必要に応じて学科会議で報告することにより情報の共有化を図った。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて来年度初めに所属する専攻が決まった。

3) 3 年生への指導

環境園芸学科では、3年生後期からは原則として全ての学生が研究室に配属されることとなっている。配属学生数の上限を年度ごとに設定し、少人数による教育体制の堅持と研究室の担当教員の負担の偏りを無くす配慮を行っている。配属先の研究室では各教員が専攻演習や研究室の活動を通し、専門分野の教育・研究指導のほか、履修・進路指導も行っている。配属作業においては、学生の希望を調査し、希望研究室が極力反映されるように配慮したが、その結果、研究室の配属者数が2～10名と不均衡となった。

休学等の事情により研究室へ未配属の学生に対しては、3年生担当教員が中心になり指導を行うとともに、次年度の研究室配属に向け2年生担当教員と情報の共有を図っている。休学中の学生については学生本人あるいは保護者と必要に応じて連絡を取り合っている。

4) 4年生への指導

上述したような学科の方針に基づき、学生は3年生後期から研究室配属され、4年生の指導は引き続き配属先研究室の教員が中心となり行っている。必修科目である専攻演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲや卒業論文を通し、教育・研究、さらには進路についても少人数あるいは個別指導を行っている。また、必要に応じ、保護者との連絡、学科での情報の共有を図っている。

3. 卒業論文概要集の作成

卒業論文で取り組んだ研究内容の要旨を取り纏めた卒業論文概要集(202ページ)を作成した。今年度で5回目となった。作成した本概要集の配布は、卒業生・研究室ならびに企画広報課にも配布した。本概要集については、4年生にとって卒業論文の内容の整理・まとめ、さらなる理解に繋がったものと考えられる。

また、研究室配属3年生にとっては4年生の卒業論文や概要とその作成の取り組み姿勢に接することができたことは、今後の自分の取り組みや研究内容の理解に大いに役立つと期待される。

4. オープンキャンパスの開催

環境園芸学科では毎年度、夏と春にオープンキャンパスを開催している。学科の全教員が参加することを基本とし、パネルやポスターの展示、実験や実習のデモンストレーション等を活用して、学科の紹介、特に研究室の紹介を行なっている。

今年度の夏と春のオープンキャンパスでは、5専の研究室のブースを設置し、各教員が研究室所属学生の協力も得ながら創意工夫を重ねたブースによる研究内容の紹介を行った。また、それぞれ3名の教員による模擬授業も行われた。

学友会の学生も学科・キャンパスの生徒・保護者への説明に加わり、参加者からは大学・学科についてわかりやすかったとの好評が得られた。

5. 「学外研修(国外研修)」の実施

「学外研修」の授業として国際的視野を広め、専門分野における知識や技術をより深化させるため、また本学科がこれまで行ってきた上海交通大学農業・生物学院と南九州大学との学校間協定書に基づく交流事業(日本庭園作庭、記念事業への参加、庭園管理・学術交流など)の一環として、本学科の国際交流を一層進めるために中国上海市等へ行った。

3月7日から11日までの4泊5日の日程で実施し、17名の学生が参加した。

移動日の研修1日目に引き続き2日目は、上海交通大学農業・生物学院を訪問し、同大学の学生と共に日本庭園の維持管理を行った。この日本庭園は、2010年に本学学生のデザインに基づき、学生と教職員が作庭したものである。午後は、両大学教員の講義と学生によるそれぞれの大学の紹介がなされた。本学の関西剛康教授は「海外における日本庭園について」、上海交通大学の羅震偉教授は「上海的公共緑地福利」というテーマでそれぞれ講義を行った。学生発表は、本学は2年生女子が3人で、上海交通大学は大学院生がそれぞれ発表を行った。

研修3日目は、上海市郊外の松江区にある上海農林職業技術学院を訪問した。午前中は、両学の施設や教育体制の紹介や本学学生による大学紹介を行った。午後は、農林学院の実習基地の見学を行った後、上海辰山植物園を訪問し、農林職業技術学院の教員と学生と共に見学した。農林職業技術学院の5人の学生が本学の学生を小グループごとに案内してくれた。

研修4日目は、蘇州市の拙政園、園林博物館、留園を見学した後、上海市に戻り、金光集団 ARCHビルを訪問し、同ビルの屋上庭園を計画設計施工した上海聚隆緑化發展の単耀暁社長の案内で見学した。黄浦江河畔にある「100万円の夜景」が見えるレストランにて夕食後は、外灘（バンド）をバスにて観光した。

5日間の日程を通し、学生の国外研修という教育的視点、他国の教育機関との交流という国際交流の視点双方においてたいへん有意義な成果が得られた。

6. 学生の資格取得支援

1) 園芸系

①毒物劇物取扱責任者

当該資格の説明会と受験講習会を隔年ごとに開催している。（昨年度は、説明会を行い、宮崎県の試験日程・会場等の情報を周知（就職課及び学生支援課と協働）するとともに教本や過去問題等の資料を提供）

②土壤医検定

土壤医の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

2) 造園系

以下のような特別教育、講習および講義を行なった。

- ① 小型車両系建設機械特別教育を実施
- ② チェーンソー（伐木）特別教育の実施
- ③刈払機安全教育の実施
- ④ 玉掛け技能講習の実施
- ⑤ 造園技能士実技対策講習会の開催
- ⑥ 造園技能士学科試験対策講習会の開催
- ⑦ 造園技能士要素試験対策講座の開催
- ⑧ 建築 CAD 検定の開催

また、造園系では学外における各種造園活動も授業と連携させて積極的に行った。その内容は下記の通りである。

- ⑨ 幼児教育施設等における屋外教育施設の整備計画への協力
- ⑩ 地方都市の中心市街地活性化に伴う市民広場整備計画への協力
- ⑪ 工場緑化における自然教育を視野に入れた環境整備計画への協力
- ⑫ 都城市内の河川環境整備計画への協力

3) 自然環境系

①自然再生士補

自然再生士補の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

②生物分類技能検定

生物分類技能検定の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

7. オフィスアワー

学生の学業や学生生活について、質問や相談に応じるための時間としてオフィスアワーを各教員が最低週一回カリキュラムとは別に設けている。原則として、オフィスアワー時間帯には教員が研究室に在室することとし、学生の指導にあたっている。

(2) 管理栄養学科

1. 全学的 FD 活動への積極的な参加

全学的FD活動である、各種事業に学科全教員がそれぞれ関係する事業へ参加した。それぞれの事業に参加することで、教育力向上、地域貢献などを目指すことができた。

2. 学科独自の委員会の設置

管理栄養学科では、全学的な委員会とは別に学科独自の委員会を設置し、活動を行ってきている。独自の委員会は、管理栄養士国家試験に関して対策の立案等を主な業務にする「国試対策委員会」、学生の就職支援等を主な業務にする「就職担当委員会」、高度な技能をもつ管理栄養士の養成ができるようカリキュラムの検討等を主な業務にする「カリキュラム検討委員会」の 3 委員会がある。これらの委員会がそれぞれの業務を円滑に進めることにより、学生の国家試験の高合格率、学生の就職の高内定率、高度な技能をもつ管理栄養士の排出を実現している。

3. 学科全教員で参画する管理栄養士国家試験対策

管理栄養学科の大きな教育目標として、「管理栄養士国家試験の全員合格」というものを掲げている。その大きな目標の実現に向け、学科全教員が学生たちの国家試験対策の支援を行ってきている。上記

2 の国試対策委員会が立案した国試対策方針を基に、教員は国試対策授業を行い、助手は勉強会の実施などを行ってきている。特に 4 年生になってからは各研究室の担当教員によるサポートを充実させている。これまでの組織的な取り組みの成果もあり、平成 27 年 5 月発表の国家試験の結果(9 期生)は 100%、平成 28 年 5 月発表の国家試験の結果(10 期生)は 93.3%と全国でもトップレベルの合格率を出している。即戦力のある高度な技能をもった管理栄養士の養成とともに、管理栄養士国家試験を突破できる人材をこれからも養成していく。

4. 学生の名前と顔を覚える事業

管理栄養学科では、新入生オリエンテーションの時に顔写真をとり、それをもとに顔写真と氏名の書かれた資料を作成し、学科全教員へ配布するようにしている。また、学籍カードも作成している。そうすることで、学生一人ひとりの名前と顔を覚えることができるとともに、学生指導・支援の推進に役立っている。

5. 1 年生に対する“管理栄養士になるための導入教育”の実施

これから管理栄養士を志す学生に対して、管理栄養士の役割を理解し、専門職として大成するためにその基礎を学ぶための導入教育を行っている。入学初年度からしっかりとした目的意識を持ち、職業観や使命感を培い、職業人としての専門性を身につけ、社会から期待される管理栄養士となるための心構えと自覚を高めることを目的に学科全教員で取り組んでいる。

6. 学生指導

管理栄養学科は 1 学年 2 クラス制となっているため、担任を各クラス 1 名ずつ計 2 名配置し、細やかな指導を行っている。授業への欠席が続いた学生やレポートが未提出になっている学生に対しては、早い段階で担任に連絡を取り、対応することで、長期欠席や単位未修得につながらないようにしている。また、学業への不安などがある場合は、解決策を一緒に考え、学業に専念できるよう支援を行っている。

7. リメディアル教育の推進

管理栄養学科の推薦入学等で早期に合格した入学予定者を対象に学科独自のリメディアル教育を推進してきている。入学予定者のうち、文系、理系出身者問わず、高校「基礎化学・化学」および「基礎生物・生物」レベルの基礎的な課題 10 問ほどを出し、決められた期日までに提出させている。栄養学を学ぶにあたり、化学および生物は大変重要な基礎的科目であり、このような課題を出すことで、入学前の学力向上に努めてきている。

8. 基礎的科目(化学・生物)の支援

管理栄養学科では上記 7 の事業とは別に入学後の基礎的科目(化学・生物)の支援も学科独自で行ってきている。1 年次配当科目である「からだと栄養実験」にて、高校の基礎化学・化学および基礎生物・生物に関する確認テストを実施し、当該科目が苦手な学生の抽出作業を行っている。当該科目が

苦手な学生に対しては、個別に対応するなどして、学科の授業についていけるよう支援してきている。

(3) 食品開発科学科

1. 入学前教育(リメディアル教育)の実施

入学予定の新入生が、入学後に学習をスムーズに開始できるようにすることを目標として、入学手続者を対象に、生物・化学・食品学・数学の分野に関する課題に解答の後、提出してもらいリメディアル教育を学科全教員が取り組んで実施している。提出された解答については、学科教員がコメントを添えて各自に返却している。

2. カリキュラムの検討

学科教育の根幹をなすカリキュラムの見直しは年間を通じて適宜行っている。特に、専門科目の配当年次や開講科目の検討については十分な時間をかけて行っている。食品開発科学科の名称にふさわしいように、食品開発関連の実習授業を充実させるとともに、これまで選択科目であった複数の食品開発関連講義を必修に変更することで実学教育の強化を実施した。今年度から新たに履修上限単位が設定されたことにより、来年度に向けて一部の科目の開講年次または開講期を変更し、より効果的な学習が可能となるように変更を加えた。

3. 学年別ガイダンスの強化

各学年での大学生活や卒業後の職業生活への展望を明確に持たせるために、前期・後期の開始時に学年別ガイダンスを実施している。これにより、各自で履修状況や資格取得などに関する意識付けを行うことを可能にし、より有意義な大学生活を送ることができるようにしている。

4. 怠学者および成績不良者に対する緻密な指導

授業出欠管理の徹底と教員間における情報の共有により、問題を有する学生に対して、指導教員を中心にきめ細かな指導を実施している。

5. レポート作成支援の為に「レポート工房」の運営

実験授業等で提出が必要なレポート作成に対して、「レポート工房」に設置したパソコンを用いて、1年次の食品基礎実験、食品微生物学実験などの授業において、作図や表計算プログラムの効率的な使用方法を指導している。パソコンとプリンタの導入台数は毎年増やしているため、学生の利便性も更に増し、使用頻度は着実に増加している。これまでに化学構造式を描く際に有用なソフトウェア"ChemDraw"及び描画ソフトの"Illustrator"を導入し、実験レポートのレベル向上に一役買っている。この「レポート工房」の使用に当たっては学生の自主性を尊重しているが、使用時間帯を定めていること、使用簿に記録する等の一定の規則を決めて運用している。

6. 3年前期からの研究室配属

早期に研究室へ配属させることにより、専攻生への手厚い指導・支援を可能にしている。また、研究室の大学院生や4年生のアドバイスを得ながら、2年間じっくりと高度な専門的知識・技術を習得できることも利点である。

7. 資格取得・就職支援の充実

食品開発科学科はフードスペシャリストと健康食品管理士の養成校認定を受けている。「応用食品学演習」においては、上記の資格を含む各種資格取得に繋がる教育を実施している。また、例年11月から12月にかけて実施される認定試験に向けて、後期授業の開始とともに受験希望者に対してカリキュラム時間外での受験対策講座を実施している。就職支援に関しては、1年前期に「キャリア入門」を開講するとともに、3年後期に「キャリアフォーメーション」を3年生全員の出席を前提とした授業として開講し、就職課と連携して学生のキャリア形成と就職支援を実施している。

8. 高校との連携

前年度に引き続き、宮崎農業高校との連携を積極的に行い、相互の教育に係る連携・交流を通して、学生の視野を広げ、教育の活性化を図っている。宮崎農業高校との高大連携については、低アレルギー化食品の開発として、高校内で収穫された米を製粉して得られた米粉を原料としたシフォンケーキが開発された。製粉した米粉の澱粉損傷度などを本学で分析した結果、市販の米粉に比べて澱粉損傷度が低いことが明らかとなり、高校産の米粉を使用したケーキの膨らみ具合や食感が優れていることを科学的に実証することができた。また、6月に本学宮崎キャンパスで開催された日本保蔵科学会において、開発されたシフォンケーキの即売会を宮崎農業高校生が実施した。

9. 企業との連携

食品開発科学科3年生の「食品開発実習Ⅲ」及び2年生の「食品機能学」の合同特別授業として、一般社団法人日本即席食品工業協会から特別講師を招聘し「インスタントラーメンの歴史と未来」と題して講義していただいた。今後、当学科の学生たちが食品開発分野の学びや実習を行っていく上で参考となる、大変有意義な講義となった。7月24日(木)には、シェラトン・グランデ・オーシャンリゾートフェニックスリゾート株式会社のシェフパティエによる洋菓子製造実習を行った。

食品開発科学科3年生は、夏季集中講義の実学教育の一環として、宮崎県食品開発センターにおいて、前年同様「食品製造学外実習」を行った。また、9月に20日間程度延岡市の佐藤焼酎製造場において、ベトナム留学生(2年次)1名が、焼酎用麹づくり、焼酎もろみの発酵管理、蒸留、瓶詰めなどの焼酎づくりを行い、この体験実習の様子が、日本農業新聞と夕刊デイリーに掲載された。参加した学生にとって、通常の授業等では経験できない工場現場での焼酎づくりなど貴重な体験をする機会となった。

食品開発科学科2、3年生対象の「食品開発実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の授業や卒業論文研究として、綾町の香月ワインズ(ワイン)、田野町(機能性茶)、川南漁協(魚の加工)、洋菓子店(ヘベスケーキ等)、(株)あくがれ蒸留所と学生も交えて共同開発を行い、学生が6次産業化や地域食品開発、地域ニーズ等を理解するのに役立てた。

10. 各種地域イベントへの積極的な参加

地域における食品開発の学科としての存在感を高めるために、みやざきテクノフェアなどの地域イベントに参加した。展示ブースには中学生や高校生をはじめとする多数の見学者が詰めかけた。食品開発科学科の教育・研究内容のパネル展示による紹介、学科の学生によるパンフレット配布や来訪者への南九州大学の紹介を行い、お子様から中・高校生、企業担当者、一般参加者まで、幅広い年齢層の地域住民の皆様に理解していただくことができた。また、今後社会人となる当学科の学生たちにとっては大変貴重な機会となった。

11. 学科主催卒業祝賀会の実施

卒業生の門出を学科教員で祝福することを趣旨とする学科主催の卒業祝賀会を卒業式の終了後に実施している。卒業生による思い出や感謝の気持ちを表明する機会となり、学科教員からのひとことや保護者代表による挨拶および在学生代表からの贈る言葉など、卒業式の厳粛な雰囲気とは異なるアットホームな雰囲気で卒業生を送り出すイベントとして、学科では定着している。

12. 学年を超えた学生同士の交流促進

学科内で学生同士の学年を超えた交流を促進する各種交流イベントを実施しているが、今年度は、バスケットボール大会を開催した。各学年が試合を楽しみながら、試合の合間に自己紹介などをして親睦を深めた。また、きりしま祭では学科として模擬店を出店し、各学年の学科生が協力することにより成功に繋げることができた。

13. きりしま祭で学生が模擬授業を実施

前年に続き、きりしま祭で教職課程の学生が中心となって模擬授業を行った。小学生を含めた家族連れが参加し、子供たちの関心も深めることができた。

14. 宮崎市地方創生人材育成支援事業への参画

今年度、地元の食品産業の発展に情熱をもって取り組める人材の育成を目的として、宮崎市地方創生人材育成支援事業に参画した。事業内容の一つとして、1月24日(火)に県内外から2名の講師を招聘して食の専門家による特別講演会「原料素材の特性を損なわない乾燥技術」及び「学生さんに聴いてほしい宮崎県内食品製造業の実態と県の支援体制」を実施した。学生にとって学外講師の貴重な講義を受けられる貴重な機会となった。また、同事業の県外視察として、希望する学生4名を教員が引率して、2月22日から24日の間、第14回シーフードショー大阪、三栄源エフ・エフ・アイ(株)色素研究所、大阪市内有名百貨店、インスタントラーメン発明記念館の視察見学を実施した。

15. 「食事体験実習」をフレッシュマンアワー授業として実施

平成28年6月13日(月)に食品開発科学科1年生対象のフレッシュマンアワー授業の一環として、フェニックス・シーガイア・リゾートにおいて食事体験実習を行った。この実習の目的は、テーブルマナー講習を受講しながら、地元産の食材に触れ、食の素晴らしさと有り難みを体感することで、学生たちは正装(原則としてスーツ着用)で参加し、シーガイアの専門スタッフより、接客する際のポイントを聴いた後、コース料理(フレンチコース)を一品ずつ配膳され、料理担当スタッフの方から食材などについて説明を受けた。接遇マナー講習、テーブルマナー講習、食材に関する講習など食品開発科学科の学生として是非身につけてほしい講習内容であった。

16. 平成 28 年度公募による卒業研究テーマ成果発表会への参加

高等教育コンソーシアム宮崎主催の上記の発表会への学生の参加を学科で勧めており、今年度は食品開発科学科から1研究室が口頭発表に挑んだ。残念ながら入賞は逃したが、学生たちにとって、他大学の学生のレベルを知る良い機会となり、今後の勉学にとって良い刺激となったと思われる。

17. 留学生のインターンシップサポート

食品開発科学科には、平成 27 年度に1名、平成 28 年度に2名のベトナムからの留学生が入学し、平成 29 年度においても1名の留学生が入学予定である。学科として教員による留学生の支援体制を確立するとともに、日本人学生によるサポートも必要不可欠であることから、学生を交えた留学生受入体制をこれまでに整備し実行してきた。

平成28年8月～9月に佐藤焼酎製造場株式会社(延岡市)において留学生の2年生1名が、焼酎製造の研修(麹づくり、酒母仕込、蒸留、精製)を行った。この学生は、いも焼酎造りに大変興味を持っており、ベトナムのナムディン省の農政担当者からも期待されている。卒業後は県内の焼酎会社で数年間働き、その技術をベトナムに広げたいという夢を持っている。

(4) 子ども教育学科

(1) 学科内 FD 研修会の実施

学科内 FD 研修会を、2017 年 1 月 13 日（金）9 時 30 分～12 時 30 分の日程で、子どもの学び研究所に於いて実施した。

研修内容としては、学科新任教員の研究内容の紹介を主とし、一人 30 分程度での実施とした。新任教員 5 名の研究内容の概要については、以下の通りである。

< 財部 盛久 教授 >

【テーマ】

4 年必修ゼミ・卒業研究について：どのように指導するのかアドバイスを求めて

【概 要】

1) 発表の趣旨

これまで大学教員としてゼミや卒業研究を指導してきたが、南九州大学ではこれまでの指導が通用しない。4 年で必修の専門ゼミと卒業研究をどのように指導すればよいのか、南九州大学の学生の実態に応じた合理的な指導方法について助言がほしい。

2) 発表の背景

赴任前に得た情報では、4 年関のゼミで卒業研究に取り組むことができるように、段階的な指導が行われている。また、今年度は卒業研究の担当はないとのことであった。ところが赴任してみると、登録締め切り直前に所属ゼミがないという理由で、卒業研究の指導希望学生が現れる。実際に指導を始めると、卒業研究を進める上で必要な基礎的知識がないことが明らかになり、赴任前の情報と大きなギャップであった。

指導する上での困ったのは、これまでのゼミの学習で身につけておくべきことが身に付いていない中、必修のゼミと必修の卒業研究をどう指導すれば良いのか方向を見出せないことである。とくに、後期に集中講義として位置づけられている卒業研究と資格取得のための実習が重なり、実質的な指導

ができないことには大変困った。

3) FD に関する提案

新任教師に対して年度初めに、この学科での授業について FD をやってほしい。

<山田 裕司 准教授>

【テーマ】

発表タイトル：学校と社会－教育の社会的有用性

【概要】

学科 FD 研修会では、専門分野である高等教育論、教育社会学、地域社会学に関する自身の研究成果とその成果を活用した本学の大学改革への応用について発表を行いました。高等教育論では、1990 年代以降の大学進学率の上昇に伴い学歴インフレが起こり、大学教育無用論が叫ばれるようになってきた現状を報告し、その上で、2000 年以降は大学教育の成果を点検・評価する視点から世界規模の調査研究が行われるようになったことを報告しました。また、それと同時に、各大学が独自性を打ち出すようになり、教育研究の方向性に基づいて機能分化してきていることも報告しました。

最後に、大学教育の成果を点検・評価する手法のひとつとして、卒業生調査を紹介しました。欧州諸国の研究者と共同で実施した卒業生調査にて調査した項目やそこから得られた知見－教育の遅延的効果と即時的効果－を報告しました。

本学では平成 28 年度から本学的に大学 IR による教学改革に取り組んできています。大学教育の成果を点検・評価する卒業生調査や、大学の機能分化の視点を踏まえて、今後は特定の教職員ではなく多くの教職員が教学改革および大学改革に向けた取り組みに着手するきっかけとなればと考えて、高等教育研究とその成果の活用について報告を行いました。

<藤本 朋美 講師>

【テーマ】

書くことの価値を問う

【概要】

担当科目「国語」（教科に関する科目）における授業内での工夫について、主に次の二点を発表した。

1) 受講基礎調査

オリエンテーションにて国語に関する受講基礎調査を行う。これは、受講前の学生の国語に対する知識について、授業者が診断的評価を行い講義計画に活かす目的と、学生が自分自身の知識を確認する目的とがある。

この調査に寄せられた要望や意見は、類型化し、第二回目の始めに学生へ伝える。そしてできるだけ丁寧に回答し、授業に取り入れられる部分については積極的に取り入れる。学生が学びたいと思っていることを入り口とすることで、学修意欲を刺激したいと考えている。また、一般的に学生は国語という教科について改めて考えた経験がないため、この調査を行うことにより学生は「知らない」ことを自覚する。自己を意識することについては、受講基礎調査の他にも学生自身の書く姿勢や筆記具の持ち方を撮影し、客観視させることも行っている。「知らない」「身についていない」という自覚から課題を明確にし、主体的な学習につなげたいと考えているが、現時点では自覚の段階に留まっている。

今後は学生の自己認識から主体的な学習や活動へ展開していくことが課題である。

2) 学習の記録

「学習の記録 (A3判用紙、全 15 回分の記録と最終コメントが記述できるようになっている)」を活用している。この記録は学生が毎回の講義終了後に活動内容と学んだことや気付き・感想を記述する。授業者は必要に応じてコメントを付し、質問等については次回講義の始めに回答を行う。学習の記録は、学生が自己の学習を俯瞰する材料となると同時に、授業者と学生とのコミュニケーションツールとなっている。

<五十嵐 亮 講師>

【テーマ】

『「講義」科目における基本的な授業形式と工夫について』

【概要】

担当する主な「講義」科目(教育心理学(専門必修、子ども教育 1 年・環境園芸 3 年)、発達心理学Ⅱ(専門選択、子ども教育 2 年)、心理学概論(教養選択、環境園芸 2 年))の基本的な授業の進め方に関して、実際の授業事例(教育心理学 第 3 回「記憶の分類と理論(16.10.17)」)を基に発表をした。

報告者が「講義」科目の基本に据えているのは、「教えて考えさせる授業(指導)」(市川伸一、2001;中教審答申、2008)と呼ばれる授業形式である。「講義」科目では、この授業でどんな知識を身に付けさせたいのかという到達目標が明確な「習得型」(⇔「探究型」)の授業が多く、そこでは、①与えられた情報・知識を理解して取り入れる段階(=「教える段階」)と、②それを基に自ら推論し発見していく段階(=「考えさせる段階」)の二つの段階が必要不可欠とされている(市川、2008)。授業展開としては、予習や教師の説明等の「教える」段階の浅い理解(=「生わかり」)から、理解確認や理解深化等の「考えさせる」段階の深い理解(=「本わかり」)へという段階性、連続性が重視されている。

そのため報告者は、第一に、「教える」段階の工夫と留意点として、「講師」主導で必要な知識を説明する「受容学習」であっても、学生が納得出来る「有意味学習」となるよう、先行オーガナイザー(学習内容に関連する包括的文章)の活用や、「体験性」の重視、「具体物(アニメ・動画)」の提示の工夫を行っていることを、具体的な授業事例を基に報告した。

次に、「考えさせる」段階の工夫と留意点として、第一段階として、「講師」の説明が理解できているかを確認する「理解確認課題」を実施していること、第二段階として、所謂「問題解決」活動として、学生からの誤解が多い問題や、「教える」段階で得た知識を活用して考えさせる「応用」「発展」的問題を取り上げ、深い内容理解を促すよう心掛けていること、第三段階として、授業で「分かったこと」「分からなかったこと」を記述させ、「質問」を書かせることで、「理解状態」をモニタリングさせるよう心掛けていることを報告した。

<野村 宗嗣 講師>

【テーマ】

3 年生ゼミ・「不器用」からの学び

【概要】

近頃、「不器用」とされる子どもたちの指導をどのように進めるのかといったことが、多くの園や

学校で課題とされている。「不器用」を表す園児や児童の様子としては、「日常生活や、園・学校生活を過ごす上での身体の動きが上手く行えない」、「日常を過ごす上でのコミュニケーションがうまくとれない」といったことがあげられる。そのような状況に際して、園や学校の指導の中で、「不器用」とされる動作の改善や獲得、「不器用」とされるコミュニケーションの改善や獲得をねらいに、個別または集団にて、対応がすすめられているといった状況がある。

今回の研修では、3年生ゼミにて進めてきた「不器用」をテーマにしたゼミ生の学びについて、紹介を行った。

3年生ゼミを通しての学びとしては、以下の計画で実施した。

- ① 「不器用」について、どのような事象であるのかを調べ、ゼミにて発表する。
- ② 調べてきた「不器用」の事象について、「運動・動作」と「コミュニケーション」の2つの観点から意見交換し、まとめる。
- ③ 「不器用」が生じる原因を、ゼミでの討論を通して考える。
- ④ ゼミでの討論を通して、放課後の地域での遊びの減少が「不器用」の一つの要因とも考えられると仮定し、“放課後の地域での遊びの減少⇒「不器用」”の関係性について調べ、ゼミにて意見交換する。

以上の過程を通して、

- ・テーマ設定する力
- ・テーマに添って調べる力
- ・テーマに添って意見交換する力とまとめる力

を獲得することを目的にゼミを行い、それを研修会にて紹介した。

(2) 「子どもの学び研究所」「子育て支援センター」「子育てひろば（みなみん）」「環境教育センター」の活動について

学部附属の「子どもの学び研究所」、「子育て支援センター」、「子育てひろば（みなみん）」、「環境教育センター」では、現場教師との共同研究や、地域の親子への子育て支援活動、更に学生も参加しての研究活動などそれぞれにおいて柱となる活動が展開されている。2016年度の活動内容の詳細は『南九州大学人間発達研究』第7巻に報告されているが、どの活動も大学教員としての教育力量を向上させることに、直接的、間接的に貢献するものである。

(3) 学生への支援について

① 担任制による学生への目配りと支援

1・2・3・4年生混合グループを編制してホームを作り、各教員がホーム担任となって、学生への相談・助言・ケア等を行っている。

② 履修計画に関するきめ細かい指導

保育士資格・幼稚園教諭免許・小学校教諭免許の3資格免許、2013年度入学生からは特別支援学校教諭免許を加えた資格免許を、どういう組み合わせでどう取得するかについての履修計画づくりへの指導・支援を、特に1・2年生段階で丁寧を実施している。

③ キャリア教育としての課外授業「夢を叶える塾」

課外授業として、小学校・幼稚園・保育園の先生として必要な資質・能力を高めることを目的に、

1年生対象の「夢を叶える塾Ⅰ」、2・3年生対象の「夢を叶える塾Ⅱ」を通年で毎週開催している。「夢かなⅠ」では県内外で活躍されている方による「講話」等、「夢かなⅡ」では小学校志望者には採用試験対策講座、保育者志望者には手遊びや手作り人形、パネルシアター・ペープサートによる劇づくり等を行っている。学年末にはパネルシアターやペープサート劇の発表会を「夢かな劇場」として開催した。また6月には二本松はじめ氏を招いて「つながりあそび・うた」のワークショップを全学年参加のもと実施した。

④ 3・4年生の教育・保育実習の指導・支援

小学校・幼稚園の教育実習、保育所・児童施設の保育実習に3年生・4年生を送り出した。小学校教育実習では、周到な事前指導が実施され、実習校からは実習生への高い評価を得ている。学生たちは実習を通して大きな達成感を得ることができ、大学での授業に向かう姿勢等に良好な変化がみられている。

⑤ 学科教員全体での学生に関する情報の共有と支援

学科会議において、「気になる」学生に関しての情報交換・共有に努め、教員全体で支援を行っている。なお、「学生支援連絡会」において、学生部教員を含む複数の教員、保健室、学生相談室、学生支援課で気がかりな学生についての情報交換会を行っている。ここでの学科教員全体で共有した方がよい情報については、その後、学科会議で共有し、学生支援に役立てている。

(5) 教養・教職センター

FD 報告作成をフリーソフト(**emacs**, **Gnuplot** など)による「再現可能な研究」(Reproducible Research)と情報デザイン(Edward **Tufte**'s Information Design)技術を磨く機会にし続けている。授業評価アンケート結果が世論調査と数値視覚化を深く考える機会になる。

センター会議でFD委員会の活動と課題の話をする。 これからもそれぞれのプレゼンや板書のアプローチについて話し合うといいようだ。 例年通りは特にアンケート結果が低い「質問や発言をした」に感ずる設問についていろいろなアプローチを話し合った。 いろいろな授業形式があつて、すべての授業に対して、「質問と発言」を増やす必要か疑問もあつた。 低い結果に対して基準を設けたほうがいいか? 例えば3以下の結果になったら特別の仕組みを考えたほうがいいか。 アンケート結果結果を話し合つて、「ホーソン効果」しか期待しないほうがいいか? アンケート実施だけじゃなくてもっと有機的に授業改善方法を探る方法はないかなど、 充実した話ができた。 授業の話をゆっくりできる機会を増やせばまた、いろいろな気づきを共有できるだろう。

(6) 大学院

1) 教育・研究用機器の購入

UV 撮影装置 (ATTOWSE-5200) を購入し、都城キャンパス本館 8 階機器室 2 に設置した。
機器の納入に合わせて機器の取り扱いに関する講習会を開催した。

日時：平成 26 年 5 月 25 日 (水) 13:30 ～

場所：都城キャンパス本館 8 階演習室

2) 中間発表会の開催

園芸学・食品科学研究科 園芸生産科学専攻 環境保全園芸学研究室の中間発表会（修論進行状況報告）を開催した。

日時：2016 年 9 月 29 日 (木) PM 4 : 45～

場所：都城キャンパス 1105 教室

3) 大学院修了生の体験講演会について

日時：平成 26 年 12 月 12 日 (月) 12:30 ～ 13:10

場所：宮崎キャンパス 1217 教室 (テレビ会議システムで接続)

都城キャンパス多目的会議室

演者：兵庫県立佐用高等学校農業科 清水彩教諭 (平成 20 年度修了生)

略歴：本学園芸学科卒業、大学院園芸学専攻 (環境保全園芸学研究室) 修了、有馬高校など常勤講師を経て、兵庫県高校教員 (農業) 採用。

4) 大学院パンフレット作成

「環境・緑・食への挑戦！」カラー刷り 14 ページの冊子

5) 大学院研究科招へい講演会の開催

①開催日時：1 月 20 日 (金)、16 : 30 ～ 18 : 00

②開催場所：都城キャンパス 3 号館 2F 大会議室 (TV 会議)

宮崎キャンパス 2F 会議室 (TV 会議)

③講師：株式会社サントリー植物科学研究所

田中良和 所長 (日本農学賞及び読売農学賞の受賞者)

④タイトル：色の秘密とポストゲノム (仮)

6) 修士論文発表会の開催

会場：都城キャンパス 本館 1 階多目的会議室

日時：2 月 22 日 (水) 13 : 00～

会場： 宮崎キャンパス 1217 教室（大講義室）

日時： 3 月 3 日（金） 13：30～

7）大学院研究科掲示板の設置

宮崎キャンパスと都城キャンパスに大学院研究科掲示板を設置し、大学院生への情報伝達の利便性の向上を図った。

9. 他大学等の FD 活動の情報収集について

他大学から寄せられる FD 活動に係る情報の共有化に加え、積極的に他大学の FD 推進活動を調査し、共有することを開始した。本年度は、各学科やセンターの分野に近い他大学の FD 推進活動をそれぞれが調査し、優れた FD 推進活動の情報を共有した。

- ・ 帝京大学 高等教育開発センター 教育関係共同利用拠点事業（パンフレット）
- ・ (株)教育ソフトウェア FD 活動支援アウトソーシングのご案内（パンフレット）
- ・ 創価大学 教育フォーラム開催（7/23）のご案内（パンフレット）
- ・ 国士舘大学 FD ニュースレターVol.5、第 3 回研修会、第 11・12 回 FD シンポジウム報告書（パンフレット・冊子）
- ・ 山形大学 第 16 回 FD 合宿セミナー開催（9/5～7）について（開催案内）
- ・ 神奈川大学 第 11 回高大連携協議会フォーラム（8/5）案内状（開催案内）
- ・ 国士舘大学 FD ニュースレターVol.6 第 3 回研修会、FD・SD シンポジウム、第 14 回 FD シンポジウム報告書（パンフレット・冊子）
- ・ コンソーシアム宮崎より講演会案内：
 - 7 月 21 日（木）宮崎大学、講師：濱名篤（関西国際大学学長）
 - 7 月 22 日（金）宮崎国際大学国際教養学部、講師：濱名篤（関西国際大学学長）
- ・ (社)まなびのコミュニティ協会 第一回学校経営のための教育サロン（開催案内）
- ・ (公社)私立大学情報教育協会 平成 28 年度教育改革 ICT 戦略大会（開催案内）
- ・ 大学コンソーシアム八王子 第 6 回大学コンソーシアム八王子 FD・SD フォーラム（開催案内）
- ・ 山形大学 教員研修会「第 18 回基盤教育ワークショップ」（開催案内）
- ・ FD ネットワーク“つばさ”+山形大学 大学間連携 SD 研修会（開催案内）
- ・ FD ネットワーク“つばさ”学生 FD 会議（開催案内）
- ・ 教育ソフトウェア 次年度 Web 化のご提案（パンフレット）
- ・ 宮崎大学工学部 FD 講演会の開催案内
- ・ 山形大学“つばさ”プロジェクトシンポジウム
「大学間・地域連携による教育改革の可能性」
- ・ 宮崎大学第 2 回 FD/SD 研修会「教育改善～教育力を高める」
- ・ (公社) 私立大学情報教育協会
平成 28 年度大学職員情報化研究講習会「ICT 活用コース」（開催案内）
- (・ 南九州大学 SD 推進委員会からのお知らせ 提案箱（仮）の設置について)
- ・ 宮崎大学障がい学生支援室 FD/SD 研修会
「発達障がい学生とキャリア支援」（開催案内）
- ・ コンソーシアム京都「第 22 回 FD フォーラム」（開催案内）
- ・ 私立大学情報教育協会「平成 28 年度 FD のための情報技術研究講習会」（開催案内）
- ・ 私立大学情報教育協会「産学連携事業『大学教員に企業現場研修』」（開催案内）
「発達障がい学生とキャリア支援」就職課員参加
- ・ (株)教育ソフトウェア 大学 FD/SD 学習会 2017（パンフレット）

10. 他大学、FD フォーラム等への参加報告

(1) FD ネットワーク “つばさ” 主催「大学は就職予備校ではないぞ！」参加報告

平成 28 年 9 月 13 日(火) 会場:山形大学

教養・教職センター委員参加

学生 FD 会議 2016in 山形大学

テーマ：「大学は就職予備校ではないぞ！」

～我々の可能性を広げる時間と空間を考える～

アンケート実施とその結果は興味深いですが、もっと有機的な情報収集の方法がないかと思って FD ネットワーク“つばさ”の「学生 FD 会議」に参加したくなった。それぞれの大学の学生や先生が授業の話をしている様子を聞いて参考になる点が多かった。

スケジュール

	開始	終了	イベント
1	13:00	13:30	受付
2	13:30	13:40	開会挨拶
3	13:40	14:00	自己紹介・アイスブレイキング
4	14:00	14:30	オリエンテーション
5	14:30	17:00	グループ討論・発表準備
6	17:00	18:00	全体発表
7	18:00	18:20	閉会挨拶
8	18:30	20:00	情報交換会

受付の時から東日本の各大学の学生や職員と充実した話ができた。

挨拶は山形大学のウェブサイトに乗っている。一つ印象に残った話、アイスブレイキングがアイスメイキングになる可能性があるということだった。

グループ(学生 4～5 人と職員 2～3 人)に分けてから自己紹介の工夫の参考になった。考える時間 3 分が終わってから一人ずつ 1 分の話をした。内容は：

- 名前
- 大学名
- 学部
- 出身地
- 大学自慢
- ふるさと自慢

アイスブレイキングはグループで問題解決形式だった。広い廊下でどちらのグループが一番高い「ニュースペーパータワー」を作れるか？ 創造性のあった試しがいろいろあって面白かった。山形県産の賞品もあった。個人的に「プロジェクトアドベンチャー」など紹介する非競争なアイスブレイキングが好きですけど「ニュースペーパータワー」も楽しくて、いつまにか皆気軽に話し合えるようになった。

オリエンテーションの「趣旨説明」は「大学時代、今頑張っていること、これから頑張ること」だった。自己紹介と同じように3分間考えてから一人ずつ1分間話した。資料に内容へのヒントは：

- 勉強
- サークル
- アルバイト
- 恋愛
- 趣味
- 就職活動
- 何でも可

一番印象に残った話は時間とお金の余裕課題だった。バイトを選ぶか、時間を選ぶかのような選択の問題があるようだ。

グループ討論と発表のメインテーマは「私の大学時代はこんな素晴らしい時代だ」。学生にとって大学の生活が3つに分て見ていると分った。二つしか一所懸命できないから一つを犠牲にするしかないような話しが興味深かった。勉強と部活とバイトのどれか一つを適当にして、残りの二つを一所懸命するような選択幅らしい。

全体発表で特に強く残った印象は二つの話：講義中に関係ない話する先生への不満や大学生の「特権」の話。一度社会に出てからまた大学に来た学生は講義中の分野外の話に違和感があった。参考になった。10数年前、ほとんどの講義で講義名と関係ない血液型占いの話ばかりするような先生がいた。試験の直前にあったら慌てて教科書を取り出して、関連性のある話する講義がいやだった。学生はそのような関連性のない講義時間を減らすのにFD活動の効果を評価していた。

学生の「特権」と「責任」について話した学生も何人かいた。就職する前に授業をサボって遊びに行けるのが特権らしい。高校は厳しかったし、就職してからサボれば首になるし、大学の時代だけサボって遊べる時期だ。その特権と勉強やバイトへの責任をバランスする計算が大学性の課題と成長する機会に見える。遊びの内容はドライブか観光のような話だったと思う。特権と余裕があったら、ゆっくり考える機会、新しいことを深く理解する機会として見えてないのが残念だ。

「特権」と「遊び」(余裕)の話を聞いたらルイス・マムフォードの話が思い浮んだ。

… an economy of abundance brings with it, not the duty to consume, but the readiness to create.
- Lewis Mumford Transformations of Man

教養の授業、哲学か文学か名作文、の授業で人間観を考えればいいと思った。人間はただの消費者だけじゃない、消費するより創造しようとしたほうが深い満足感に繋がるじゃない。ルイス・マムフォードじゃなくて、バートランド・ラッセルの「幸福論」か「教育について」(On Education)でも話し合えたら大学らしい世界観について話し合えるようになるかなと思った。

講評・閉会挨拶で私も新しい見方と触れることができた。始めの挨拶でアイスメイキングに触れた小田隆治先生は、何時間も血液型占いの話ができる人がそんなにいないから、その講義も貴重な経験と見れるじゃないかと話した。そう思える学生はどこに行っても勉強でいるから幸せだろうと思った。

参加大学と人数

大学	学生	教員	職員	人
北海道大学	1			1
北翔大学	1			1
八戸学院大学	2	1		3
仙台白百合女子大学	3	1		4
仙台大学	2	1		3
羽陽学園短期大学	2	1		3
山形県立保健医療大学	1			1
東日本国際大学	4	1	1	6
会津大学	3	1	1	5
南九州大学	1			1

大学	学生	教員	職員	人
山形大学	6	4	5	15
合計	23	13	7	43

キャンパス内の食堂で情報交換会で学生と職員との交流できてよかった。講義中の関連のない話をする先生が嫌われるかもしれないと話した。その話を聞いて、私も少し冷や汗が出た。終わったばかり学期に、基礎的な英語の勉強が早めに終わった授業に「オズの魔法使い」の本と映画の話をしていて。本は1901年のクラシック、映画は1939年のクラシック以来いろいろな話題性のあるリメイクされている。最近の債務(借金 Debt)についての記事で1901のオズの話が出るし、1939年のオズのセリフも一人歩きしているので、ちょっとした息抜きしながら教養の話になると思った。けどある学生は、その話は個人の趣味を人に押し付けているとしてしか見られなかった。自分は別に好きか嫌いか思っていなかった、それぞれの時代の話題性と物語の再解釈が興味深いだけと思ったけど、その学生の受け止めかたが予想外だった。新しいことを習った後、「空白」(Vacant)の間も必要だろうから、正式な授業を早めに解散して、直接に講義と関係ない話を聞きたい学生だけ自由に残れる仕組みも考えなくなった。

今度、学生と一緒に来てと誘っていただいた先生もいた。いつか宮崎から先生と学生と一緒に行って交流できればいい。いつか、宮崎県、または南九州でFDネットワーク“つばさ”のように学生も参加するFD活動できたら参加したい。

- ご挨拶

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gp/tsubasa-p2012/aisatsu.html>

- 学生FD会議2016の開催について

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gp/tsubasa-p2012/20160913.htm>

(2) 高等教育コンソーシアム宮崎FD研修会に参加報告

平成28年9月13日(火)7月21日(木)～22日(金)

①7月21日(木)「DP・CP・APの見直しをどう進めるか」

会場:宮崎大学

②7月22日(金)「3つのポリシーに対応した学習成果の測定と可視化」

会場:宮崎国際大学国際教養学部

大学関係者は、宮崎キャンパスから4名、都城キャンパスから3名が参加した。

(3)宮崎大学工学部FD講演会「入学者選抜の改革及び大学教育の改革」参加報告

平成28年度宮崎大学工学部FD講演会

(宮崎大学工学部主催 全学FD専門委員会共催)

日 時: 平成28年11月15日(火) 15:00~16:30

場 所: 宮崎大学 330 記念交流会館 コンベンションホール

講 演: 「大学入学者選抜の改革及び大学教育の改革」

石川 仙太郎(文部科学省大学新興課課長補佐)

日本の大学を取り巻く現状の解説後、高大接続改革の重要性、大学教育改革の方針、大学入試選抜試験の改革についての説明があった。特に、センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト(仮)」についての検討及び進捗状況は参考になった。

(4)宮崎大学障がい学生支援室FD/SD研修会参加報告

発達障がい学生のキャリア支援

「就職」のための支援から「働き続ける」ための支援へ

平成28年12月12日(月)宮崎大学FD/SD研修会

特定非営利活動法人クロスジョブ神戸 松原 崇 氏

松原氏は、大学における障害学生支援を12年間経験され、2014年4月より、発達障害のある人の就労移行支援として支援事業所を立ち上げられました。

発達障害学生の卒業者に占める就職者の割合は、学生全体に比べ、非常に低いとの結果が出ています。

【就職に関わる困難例】

・就職活動に入ることの困難: 授業や卒業研究だけで精一杯だったり、二次障害が生じていたり、就職活動の流れに乗れず、出遅れてしまう。

・適切な進路選択をすることの困難: 働くということや仕事のイメージを持ちにくい。

自分の適性を考慮して、仕事や働き方(一般枠/障害者枠など)を選択することができていない。

発達障害が推察されるが、自覚や診断には至っていない。

・選考過程を経過することの困難: 自信を喪失していたり、社会経験が少なかったりして、自分の良

さが分からず、志望動機や自己 PR を制作することが難しい。

面接において、身だしなみに無頓着だったり、質問者の意図と外れた回答をしてしまう。

【早期からの継続就労を見すえた支援】

・発達障害を含む精神障害者の 1 年以内の離職率は 44 %。就職だけでなく、先々の継続就労を見据えた支援の必要性、支援者が早期から卒業後を意識して関わることが大切。

・学生全般を対象とするキャリア支援の充実は、発達障害学生のキャリア支援の充実でもある、自己分析（希望、能力、価値観）、勤労観（働くということの理解）、職業観（業種・職業の理解）、ビジネスマナー

・発達障害学生からすると、発達障害学生を主たる対象とする「特別支援」よりも参加の敷居が低く、参加の敷居が低く、未診断、診断未満の学生でも活用できる。

2,

学内にてインターンシッププログラムを行った事例を利用し説明があり、良かったポイントをあげられました。

・家族や教職員の協力も得られ、支援を通じ修学が安定したため → 余裕ができ苦手さに向き合えるようになる。

・良いタイミングで就業体験が実施でき、家族や支援者を含め、自分に合う仕事や働き方を整理・共有できた。

【継続就労】

ミスマッチを起こさないよう、自己理解と仕事理解が必要。（障害がない学生にも言えることです。）

自己理解の支援

・障害特性と不得手に対しては自己対処や必要な配慮の理解。

・本人のペースや納得を重視し、自ら気付いていく課程を支援する。（必ず納得させること！）

・発達障害学生支援は、診断があること、自覚があること、困り感があること、支援要請があることを出発点に出来ないことが多い。家族や周囲の教職員が困っている状況に気づき、困っている状況を説明し、困り感や支援ニーズを持っているよう関わる。段階的に学内相談機関に繋ぎ、障害特性と関連した理解に繋げる。

・「良さ」「できていること」「強み」への注目を促すことが大切。自分の良いところを自覚できてこそ、苦手なことや失敗へも向き合える。

仕事理解の支援

・働くということ、仕事の内容、仕事で求められる能力や振る舞い方の理解。

就業体験を通した自己理解/仕事理解

・実体験からの学びが理解しやすいことが多い。

・置かれた環境によって、得意不得意の出方が大きく変わるため、修学の環境下だけでは仕事に関わる自己理解には不十分。就業体験で思わぬ良さ、思わぬ困難を見いたすこともある。

苦手さへ配慮しつつ、育てる支援を

- ・経験を積んだり、やり方を具体的に教わったりすることで、苦手であっても、 できることは増やしていける。
- ・大学に存在する豊かな経験や繋がりに参加できることも大切。尊敬する先生方、 一目置く先輩、一緒に楽しめる友人、信頼できる窓口の職員の方々、同じ発達障害のある仲間。
- ・雇用可能性を高めるために、得意な部分に合致したプラスαの専門性を。

総合的な学生支援体制を活かした支援「よりよく機能させるための研修・情報交換・提言」

<第1層 日常的学生支援>

学習指導、研究室運営、窓口常務など

<第2層 制度化された学生支援>

クラス担任制度、アカデミック・アドバイザー、チュートリアル・システムなど

<第3層 専門的 student 支援>

学生相談機関、キャリアセンター、学習支援センター、保健管理センターなど

- ・困り事への気づき、親身な対応、丁寧な窓口対応、修学支援の実施
- ・修学支援の調整、自己理解の促進、就業体験、職場開拓、家族・外部機関との連携

印象に残ったことば・・・

- ・キャリアに正解はなく、本人の希望とペースを尊重しながら、先々の継続就労を目指して、より良い進路選択ができるよう、関係者が連携しその時々でできる支援を行うことが大切。
- ・大学まで進学した学生がそれぞれの能力や良さを活かし伸ばし、認められ、役に立ち、必要とされる居場所を社会に得ていけるよう、学内外の諸機関が課題共有し、それぞれにできることを出し合い、切れ目ない必要な支援をしていければと願っている。

【本学について】

- ・教職員にて気づき、保健師と相談→カウンセラーを促してみるといった、流れをとっていると思う。
- ・就職課についていうと、話をされていて目を合わせなかったり、約束が守れないといった事があって、いわゆるグレーゾーンの学生を目にすることがある。
- ・本人が気付いている場合とそうでない場合があり、資格を持った職員ではないため、対応に困るというのが本音で、保健師やカウンセラーに引継ぎ、無理なく、進めていくようにしている。
- ・本人から担当の先生には言わないでくださいといったこともあるため、対応は極めて慎重にする必要がある。
- ・現在、困り事がある学生に対しては、「やりたいこと」を探すよりも「やれること」を探す就職支援を行っている。
- ・学生に関わる各個人がコミュニケーションを取る際に気づいた点を、学内相談機関へ情報共有をし、どう対応して支援していくことが良いかを話し合うことが必要と思われます。
- ・学生の困り事はそれぞれ違うため、それぞれに合った支援を行っていくことが重要です。

11. 平成 29 年度のFD活動に向けた新たな取り組み

平成 29 年度は、これまで構築してきた FD 活動を更に向上させ充実した FD 活動へと発展させていく。そのため、平成 29 年度は、これまで構築してきた FD 活動を更に向上させ充実した FD 活動へと発展させていく。また、SD の義務化に対応した組織の改革、充実に積極的に参画していく。

FD 推進委員会が平成 29 年度に実施する事業は以下の通りである。

- 事業① 授業評価アンケートの実施（前期・後期）**
- 事業② F D 講演会の実施（年 1 回秋に実施）**
- 事業③ 新入生魅力度調査及び卒業生満足度調査の実施**
（前期：新入生対象、後期：卒業予定者対象）
- 事業④ 授業参観の実施（後期）**
- 事業⑤ 各学科独自の F D 活動の実施**
- 事業⑥ FD 活動の情報収集**
- 事業⑦ SD 義務化に伴う教職員 SD 活動への参加協力**

事業⑦SD 義務化に伴う教職員 SD 活動への参加協力については、詳細を以下に示す。

〔目的〕

SD の義務化が始まり、大学はその教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、事務職員だけではなく、教員や技術職員を含む全スタッフを対象として、必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための機会を設けるほか、必要な取り組みを行うことが求められることとなった。

平成 29 年度は、FD 推進委員会及び SD 推進委員会の位置づけの変革が見込まれる。それについて、積極的に協力、参画する。

〔予算〕

本事業に関して委員会予算は発生しない。

12. FD活動の反省と今後の活動について

(1) 環境園芸学科

新入生魅力度調査では学生の生活環境、サークル活動を行う上での環境について十分な魅力を得ていないとの結果が得られた。これらは全学的な問題であり、関係部署と連携をしながら対応を考えなければならない。また、新入生の中には就職支援活動や学科の担任制等について知らないものもかなりいることから、これらについてはオリエンテーションや掲示等での周知をより徹底する必要があると考えられる。方策を練らないと、おそらく魅力度が向上することはないであろう。

卒業生満足度調査においては、昨年度より満足度が低下する傾向が見られた。早急にその要因を分析し対応策を検討する必要がある。

満足度調査は同一学生による結果ではないが、卒業生満足度調査と新入生魅力度調査を比較すると、本学の理念、実学教育と少人数教育について卒業生満足度が低下している。また、学生の専門科目に対する高い関心が認められるが、一方で教養教育科目に対する魅力度・満足度が低いことが示されている。学生への教養科目の重要性の理解や教養科目の在り方、教養と専門のバランス（専門の特化も含め）等について検討が課題として考えられる。これらの結果は大学としての根幹に関わることであり、大学あるいは学科として早急な結果の分析とその対応が必要である。特に教養教職センターとの連携を深め、科目の選定や配置について熟考しなければならないだろう。

授業評価アンケートの結果からは、顕著な値の変化は見られなかったが、昨年度よりわずかではあるが低評価であった。

参観授業については、開催数は3授業、参加者15名であった。大学全体が昨年度より2.2倍の増加であったのに対して伸び率2倍以下と低かった。これまで参観授業の参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられていることから、なお一層の参加促進を訴えていく必要がある。

学科独自に取り組んだFD活動については、3年ぶりに再会した学外研修（国外研修）を除き、前年度から継続する活動や企画を繰り返したものが多い。これらの活動が形骸化しないよう、FD活動の意義について各教員個人が、また学科として再認識する必要があり、さらには独自の新しい活動や企画を積極的に考案、実施し、FD活動を推進させる取り組みが重要であると考えられる。

(2) 管理栄養学科

管理栄養学科の独自のFD活動は最終的に“学生の実食士国家試験合格”という目標に向けての活動の比重が大きくなるため、主に「教育」に関連する活動に対しては充実しているが、それ以外の活動の充実が弱い傾向にあった。南九州大学FD推進委員会規定にも書かれている通り、FD活動は、教育活動に限ることに限らず、研究活動、社会貢献、管理運営に関することも必要である。それをうけて今年度も昨年同様、地域連携等における「社会貢献」に関する活動をさらに充実させてきた。次年度も地域社会との連携活動を強化していく。

また、毎年の課題となるが、管理栄養学科においては、教育活動に関するFD活動だけでなく、研究活動などのFD活動も取り入れていくことが必要である。管理栄養学科では、厚生労働省（関東厚生局）

による監査もある。管理栄養士養成課程で専門基礎科目および専門科目を教授する教員の研究歴が少なければ(毎年一定の研究業績があるかが問われる(過去にたくさんの業績があるのではなく、継続的に研究を行っているかが問われる))、管理栄養士養成施設の専任教員として認められない可能性がある。厚生労働省(関東厚生局)による監査を乗り切るために、各教員の研究推進を図ることが重要であるため、その取り組みとして、研究推進の仕組み・方法についても引き続き検討を重ねていく必要がある。

(3) 食品開発科学科

(1) 今年度の反省

今年度の前期・後期の授業評価アンケートの分析結果として、授業実施方法に関してはほぼ前年並みの評価であったが、授業内容と学生の将来像を結び付けられないという回答が目につくようになってきた。また授業の理解度も若干低下してきていることが判明した。授業参観に関しては、学科内で参観を積極的に促した結果、前年を上回る参加者が得られた。教員に対して授業参観の意義をより浸透させていくための方策も考え実行する必要がある。学科独自の FD 活動に関しては、従来からの継続事業を中心に引き続き学生の教育・研究内容の向上に繋がる多種多様な活動を実施することができた。

(2) 次年度以降の FD 活動

授業に関しては、学生がより自主的・積極的に取り組むことに繋がる授業、双方向型の授業が定着しつつあり、今後も積極的に継続していく。専門教育関連では、食品開発に関する専門知識を実践的により広く、より深く学ぶことができるように、引き続き教育体制の整備を実施していく。具体的には、学生の専門知識・技術の習得に繋がる食品開発実習教育及び醸造実習教育関連の設備の充実をさらに進めていくことにより、実学教育を一段と強化していく。また、地域社会との連携活動を段階的に強化して、学生の教育・研究の充実に繋がる産官学金の連携を深めていく。県内実業系高校との連携では、29 年度も引き続き宮崎農業高校をはじめとする県内の複数の高校と連携活動を実施するが、学生がより積極的に参加できる活動をこれまで以上に増やしていく。

(4) 子ども教育学科

昨年度は、卒業生 70 名うち、公立小学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者 12 名を含む 66 名全員が就職する結果(就職率 100%)となり、就職以外の 4 名も大学院等への進学を決めるなど、前年度以上の好結果を示すこととなった。

この就職実績が反映されたように、本年度実施した卒業予定者満足度調査の就職支援に対する回答として、「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」、「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」が比較的ポイントが高かった。同調査の教育研究に関する回答でも、「4 年間の学びを教員がきめ細かにサポートする」、「ホーム制や 1 年次後期から始まる少人数のゼミ」、「夢を叶える塾での就職試験対策など、手厚い進路サポート」の評価が比較的高く、相乗効果が働いていたものと考えられる。

また、本年度実施した学生授業評価アンケート実施結果が、前期、後期ともに昨年度の結果を上回ったことは大きな成果といえる。昨年度の反省事項を踏まえ、教員各自が授業改善のなかで改めて自

身の授業の在り方を振り返り、創意工夫を重ねるとともに、アクティブ・ラーニングを目指した「学び方・教え方」に着目し、思考発信型授業へとイノベーションを起こしつつあるのではないかと考える。

今後の課題として、教員の退職等に伴って、専門分野に応じた新たな教員を迎え入れるなど、学部全体を見据えた教員の配置も含めて、教員相互の研究や教育内容について相互理解が深まるようにFD活動の時間の確保に努めていきたい。さらに、学生の教職志望に応じた学校種等の免許状選択を踏まえて、これまでの教育内容の成果と課題を改めて総括し、カリキュラムの改善等を検討していくなど、授業と教員との横断的な専門性のつながりを追求していきたいと考える。

(5) 教養・教職センター

もっと積極的に大学・教育の使命・目的を話し合えるようにするそれぞれの分野の講義の繋がりに気づいて、大学の勉強の辻褄(一貫性 Coherency)を強化できるといい。授業の内容だけじゃなくて、もっと出欠・席順など授業運営の(フリーソフトによる)工夫を共有できる機会を作るべき。

教養・教職センターの授業は何のために「役立つ」かと大学の勉強の辻褄「有機的つながり」(一貫性)を深く考える課題があって話し合うようにできればいい。大きい課題であるけど、センターではそれぞれの専門分野のお互いの関係と人類の中の位置が見えるように努める方法を探れると充実したFD活動に繋がる。「絵で見る英語」シリーズは教養センターまたは大学教育の本来目的に役立っているか検討したい。教養は自由社会の自立した市民のための教育の中心であるはず。

授業のアプローチなどについての話し合いを増やす努力する。

"General Education...that part of a student's whole education which looks first of all to his life as a responsible human being and citizen... which befits or helps to make free men...its aim... to produce a rounded person with a full understanding of himself and of his place in society and the cosmos." **The Harvard Committee** 'General and Special Education' in *General Education in a Free Society* pp. 63-64 (1945), quoted in *Toward Liberal Education* (1955) Eight Printing.

(6) 大学院

平成28年9月より南九州大学FD推進委員会規程の改正に伴い、FD推進委員会の構成員として組み入れられた。大学院のFD推進委員は学部のFD推進委員との兼任でスタートした。大学院に関して本報告書への掲載を見送ると意見もあったが、可能なものは掲載することとした。

平成29年度からは、年度最初からFD推進委員会の構成員として委員を置き、FD推進活動に積極的に参画していきたい。